異世界でベタに生きる

じゃがいも畑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界でベタに生きる

【Ｎコード】
Ｎ５４１２Ｚ

【作者名】
じゃがいも畑

【あらすじ】
突然、異世界に飛ばされた主人公が、がんばるお話です。

1（前書き）

拙い作品ですが、宜しくお願いします。

1

理不尽ってやつは、被る本人が特に何か悪いことをしたわけでもないのにやってくる。

親に暴力を受けたり、学校でいじめにあったり、通り魔に突然殺されたり……。

平和な日本でだってこれだ、発展途上国や人権のない国なんてもっとひどいことがあるだろう。

そしてやっかいなことに、理不尽ってのはどんなに自分の正当性を訴えたり、悲劇を嘆いたりしても、向こうから消えてくれるなんてことはない。

ひどい時なんか、何もすることができないまま、全てが終わってるなんてこともある。

まっこと、憎らしい事象だ……

ってかホント……どうしろっていうんだよ……。

俺は今、森の中に立っている。

何の前触れもなく、いきなり森の中に立っている。

立派な木が乱立してるせいか、太陽の光はかろうじで届く程度のようで薄暗い。そして、ちょい寒い……

空気のうまさが尋常でない点からしてもかなりレベルの高い森なのだろう……シシガミ様とか出そうだ。

さて、ではなぜこんな高レベルな森に俺はいるのだろうか……

と考えてみても答えは一向に出てこない。

なんせ5分前まで池袋にいたのだ。

ホントにフと気づいたらここにいた。

そんな感じなのだ。

その証拠に服装は制服（夏服）、カバンは通学用のスポーツバッグという装いで、自分が池袋の繁華街を歩いていた時のまんまである。

「はぁ……どうなってんだよ……混乱しすぎて脳ミソ破裂しそうだ……うがぁあああ！」

俺は頭を抱えながら咆哮し、そのままその場でフリーズした。

2

１５分ほど無の境地に陥った後、再起動した俺はとりあえずわき上がる恐怖や不安、怒りを無理やり抑え込むことにした。

「まずは現状把握と行動指針の決定が最優先事項だな」

と声に出して確認し、己に言い聞かせる。

始めにしたのが携帯チェックだが、当然これは圏外。時刻を確認してみたところ、１９：３２と表示されてはいるが、今いる場所は一応太陽の光が確認できるため、これも特に意味はなさそうだ。

あとはまぁ……財布の中には、お金とＰＡＳＭＯ、各種ポイントカード。

バッグの中には汗まみれの柔道着とインナー、あとはノートに教科書……

およそサバイバルには不必要なものばっかりだ。

絶望的な状況なのを再確認し、次は行動指針だが……

これに関しては

「とりあえず、ここにいてもしょうがないよなぁ……なんせ木しかないし。

移動するしかないな……誰かいてくれればいいんだけど……」

という結論に至るまでそれほど時間はいらなかった。

ひとまず移動するということに意識を集中して、余計なことは考えないようにする。

周りは巨木ばっかりで木の実すら発見できないし、時々発見する草花やキノコは見たことないものばっかり……
虫やネズミっぽいのもしかり……
なんだここ、マジでどこなんだよ。

しばらく闇雲に歩き回ってわかったことは、人の手が加わっていない大森林を歩くのは意外と大変で、比較的歩きやすい道を選んで歩いているとはいえ、進むスピードが遅いってことだった。

じれったい思いに歯噛みするが、焦っても仕方ないと自分に言い聞かせさらに歩く。

「不幸中の幸いなのは、虫や小動物がわんさかいるってわけでもないところか……それでもこの環境で野宿は絶対したくないな」

とひとりごちていると、少し先の方からわずかだが水の流れる音が聞こえてきた。

急いでそっちの方へ進むと、陽の光が射し込む岩場が現れ、なだらかな流れの幅3メートルくらいの川を見つける。

「とりあえずこっからは川沿いを下流に向かって進もう。釣り人とかに会えるかもしれないし、村とかあるかもしれないしな」

なんとなく希望が見えてきて多少、安堵する。

小休止した後は再び歩き出す。

先ほどまでとは違い視界良好な岩場は移動しやすく、草や枝を掻き分けたり、虫とかをそこまで注意する必要がないため、逸る気持ち

も重なって小走りで移動する。

陽が傾き木々や川がオレンジ色に染まる頃、ようやく河原になっている場所に出ることができた。

周りの木もそこまでデカいのはなくなってきていて、もうちょっとで森は抜けられるかもしれないな……

という感じになってきた。

ここまでで大体、5時間。

携帯を確認してみて初めて気づいたが、全然疲れていない……。

いくら俺が柔術やら柔道やらをやっているからって、見知らぬ森で5時間も動きまわって疲れ知らずとかありえねぇ。

身体能力が上がってる？

いやいやありえないだろ……。

というところまで考えていたところ、「ぐぅ〜」という腹の音が聞こえてきて、考えるのをやめた。

どう考えても答えが出ないことより、一先ず目先の危機についてだ。

周りを見ても石、川、森しかないうえ、飲料水や食料はもちろん、ライターやナイフもない。植物やサバイバルの知識は浅いものならあるが、所詮キャンプレベルで全然信頼できない。

さてどうしたもんか……

ひとまず夕暮れを迎えている今、いくら河原で見通しがいいとはいえ、暗闇の中をここで一晩過ごす勇気なんてない。

「携帯の電池はまだあるし、（携帯の）カメラのライトを頼りに夜通し移動するしかないな……疲れにくくなってるみたいだし、なんとかなるだろ」

そう決めると、とりあえずジョギングレベルのスピードで下流へと向かう。

「がんばれ俺……」

3

「暗い……果てしなく暗い……マジかよもぉ……ふざけんなよ……」

心が折れそうになるくらいの闇が周りを包んでいる。

正直、舐めていたとしか言えない。暗すぎるぜ大自然（涙）

月の光とカメラのライト……そして闇に目が慣れてきたとはいえ、現代日本の申し子である俺にはちょっとありえない暗さだ。

だがまぁ、静寂さは漂っているが、無音でないことには助かってる。

川の流れや風の吹く音、虫の鳴く声、鳥や獣の鳴き声には結構ビビるが、これにも結構慣れてきた。

音があることで、警戒することを忘れないでいれるし、正直、自分以外の生命を感じることで、恐怖と同時にある種の安心感も得れる。

そんなことを考えながら、慎重に河原を移動していると、さっきまではなかったある異変に気づく。

「視られてる？」

そう感じた瞬間に周りを見回す。

森側、木々の隙間を「サッ」と何かが移動したのを視界の隅で捉える。

背中からドッと冷や汗が出てくるのがわかる。
体温も急に下がってきた……

マズイマズイマズイ……
「敵」かもしれない……
どうする……戦うか？
いやいやありえないだろ……
対人戦ならまだしも敵は多分動物だ、こんな暗闇で襲われたらひとたまりもない。

ひとまず全速力で逃げるということしか思い付かない。
っというか、逃げ切る以外の事態を考えたくない。

よし……行くぞ……「ダッ！」

と駆け出す。

足場が悪いし暗闇なのもあるしで全然スピードが出ないが、そんなのは百も承知！
とにかく全力疾走しかないんだよっっっ！！

しばらく泣きながら走っていると、森の中から「カサッカサッ」という音が聞こえてくる。

ヤバい、並走してきている……

しかも、こちらが向こうに気づいたのを察知したのか、仲間を呼んだらしい……数が増えている。

恐怖で大声をあげそうになるのを抑え、どうするかを必死に考える。
敵はまだ襲ってきていない。
ということは向こうはまだ体制が整っていないか、こちら側の何かを警戒しているってことだ。
前者なら整い次第、後者ならこちらが今の状態を変化させたら襲われる。

どうするどうするどうする……
ある程度までは考えられるが、恐怖やら焦りやらで対応策を考えることができない。そしてその事実にさらに焦る。

そんな状態で河原を全力疾走し続けられるわけもなく、案の上「ガッ」という音と共にコケる。

「ぐっ…」

なんとか受け身はとったが、痛みが身体を駆け巡る。
だがそんなことに頓着している暇はない。

急いで立ち上がらなきゃと思い顔を上げると……

「おいおいマジかよ……」

すでに俺は何かに囲まれていた……
川を背後にして、半円に、大体１０体ぐらいいる。
恐る恐る、携帯のライトを周りに向けると…

俺の頭の中は驚愕の一色で染まった。

そいつらは二足歩行だった……
緑色でデコボコした体表、１２０～１３０ｃｍくらいの身長、ぷっくり出た腹と細い手足、潰れた輪郭にくちばしのように飛び出た鼻と口……

俺を囲んでいる奴らは、完全に化け物だった。

「カツン」という音がした。
携帯が手からこぼれ落ちた音だ。
光が途切れることはなかったが、本当ならすぐに拾うべきだろう。
だけど俺にはそんな些末なこと、どうでもよかった。

「な、なんだよこれ……どうゆうことだよ！！」

俺はもう駄目だった。
これまで抑え込んでいた恐怖や不安に支配され、身体は震え、携帯もその場に落とし、完全に我を忘れた。

「ふざけんな！なんだよこれ！どういうことだよ！ふざけんなよ！！」

四つん這いで、両手を地面に叩きつけながら……
泣き声にも怒声にも聞こえる声で……
涙も鼻水もダラダラ垂れ流しながら俺は喚き散らした。

「ぎゃははっ」
「きぃはは」
「きぃーきぃー」

俺のそんな惨状を嘲るようにその化け物達は声をあげた。

その目は完全にこちらを見下しており、口は下卑た笑みを浮かべている。

だが、一匹の化け物が手に持ったボロボロに刃こぼれした剣をこちらに向けると雰囲気が変わった。

目には殺気を孕み、元々猫背だった体勢をさらに前傾にし、今にもこちらに飛びかからんとしている。

喰われる……

そう感じた……

その瞬間、１０匹の化け物が各々の武器を振りかぶりながらこちらに飛びかかってきた！！

俺の心も身体も恐怖に固まった。

こんなわけのわからないところで、こんなわけのわからない化け物に殺されて喰われる……

数秒後に訪れる凄惨な情景を思い浮かべ、俺は生きる気力を失った……

4

「ふん、所詮、お主はその程度の男じゃったか……」

気が付いたら全力で横に飛び、河原をゴロゴロ転がっていた。

心に怒りが吹き荒れる……

身体に熱が蘇る……

あの日誓った言葉が脳裏に響く……

「うっせぇんだよ！くそじじぃがっっ！」

立ち上がる……

立ち上がれる……

あちこち痛いし、頭から血が流れているけど、今はこれぐらいが調度いい。

「この俺が、生きることを諦めるとかどんだけだよ……修練不足だな……クソッ」

そう吐き捨て、心を鎮める。

身体の隅々まで力を張り巡らす。

肚で息を吸い、吐く。

心を、身体を、戦闘のそれに変質させていく。

敵が人型でよかった。
人型であるのなら自分が持つ技も有効だ。
静かにゆっくり構えをとる。
「きぃぃ？」
化け物の武器は俺のスポーツバッグをズタズタにしてはいたが、俺自身には一太刀も当たっていなかった。
その事実が、よっぽど不思議だったのか、一匹がリーダー格に何かを問いかけている。
問いかけられた化け物も一瞬、呆けていたようだが、こちらに向き直り、改めて、
「キィキィ！キガァァ！！」
と己の持つ武器をこちらに向け、喚いている。
それを合図に残りの９匹がこちらに襲いかかってくる。
俺と奴らの間合いはおおよそ7、８m。
向かってくる化け物の集団に隊列というものはなく、思い思いにこちらに向かってくる。
駆けて来る奴が5
飛びかかって来るのが4
俺は足に力を籠め……一気に空中にいる真ん中2匹の間に飛び込む
右手と左手で各々の顔を掴み、そのまま空中から地面に後頭部を叩きつける
「グチャッッ」という音と、両手に伝わる感覚に囚われないよう意

識し、振り返り際に一番手近にいた2匹の足元に目掛けて、右足の蹴りを放つ。

足を払われ、浮いた2匹の頭上に俺は跳び、思いきり踏み潰す。

これで残り6匹……

前方左に2、右に3、背後に1。

まずは左の2匹へ向かう。

この時点でやっと自分達が攻撃されていることに気づき、2匹はこちらに向き直り、攻撃を仕掛けてきた。

だがもう遅い。

1匹目には何もさせずに、大外刈を懸け、後頭部を地面に叩きつけ、潰す。

もう1匹はナイフによる刺突を仕掛けてきたが、半身にして避け、突き出してきた相手の右手首を左手で取り、大腰の要領で地面に投げ飛ばし、仰向けになった相手の剥き出しになった喉に向かい、思いきり拳を叩きこんで潰す。

すでに背後から3匹が迫っている。

振り向き様に立ち上がり、一番左に位置している1匹の懐に飛び込み肘を鳩尾に入れる。

くの字になったそいつの首に腕を回し、首投げをしながら折る。

残りの2匹が持ってる手斧を叩き込んでくる。

一方は頭上から、一方は俺の右から横薙ぎに両者の武器を持っている手首を掴み、横薙ぎに武器を振った方に支え釣り込み足の要領で、体重移動と右手のひねりを利用し、転ばしながら背中から地面に叩きつける。

それと平行して左手で捕まえた手首を引き寄せ、一本背負いで相手を頭から地面に叩きつけ、潰す。

仰向けで寝転んでいた残った一匹の首に拳を叩き込んで、こいつにも止めを刺す。

残りはリーダー格の1匹だけだったが、周りを見回してもどこにもいない。

どうやらとっくの昔に森へ逃げていたようだ。

俺は緊張の糸が切れ、仰向けに倒れ込む……

「ふぅ〜〜……見たかクソッタレが……」

そう呟き、ちょっとだけ休憩をとることにする。

5

「スゥゥゥ……ハァァァ……」

俺は一度深呼吸をすると起き上がり、周りをもう一度確認した。

携帯電話の光でぼんやり照らされているその場所に向かい、それを拾う。

次にズタボロにされたバッグの状態を確かめる……までもなかった。

はぁ……柔道着と帯以外はここに捨てていくしかないな……

苦笑いしつつ、作業に取り掛かる。

中からその2つを取りだしボロボロの柔道着を折りたたみ、奇跡的に損傷の少ない帯で結ぶ。

っとそこまでしてようやく気が付いたのが、自分の状態だ。

所々にこびり着いている血や肉片…それを認識した途端、胃の中から何かが逆流するのを感じた。

急いで川まで走り、そこで思いきりぶちまける。

少しして落ち着いたら、川の水で口を濯ぎ、手を洗う。

血が多く着いてるシャツの匂いも気になったので、その場で脱ぎ、簡単に水洗いした。

そうこうしているうちに、頭も働き始め、さっきの化け物どものことや、今いる場所のことについて考え始める。

「マジでここ、どこなんだ?あんな化け物がいるなんて聞いたこと

ないし、それにあの剣やナイフ……日本にポンポンあるようなもんじゃないぞ」

色々浮かんでは消えていく思考に俺は混乱を増していく。

さっきまで落ち着いていたはずなのに、また発狂しそうなほど不安や恐怖がせりあがってくる。

そんな自分に気付き、一旦深呼吸をして落ち着かせる。

風の音や川の音を聞くことで心を鎮める努力をする。

未熟だな……つくづくそう思う。

だけど今はこうやって自分を保つしかないのもまた事実だ。

情けないが、これしかない……

とにかく突き進むしかないんだと自分に言い聞かせる。

そうやってやっと落ち着くことができてから、次の行動について考える。

と言っても、今の状態じゃ取れる選択肢は全然ないよな……

とりあえずこの森を出て、人を見つけること。

簡単だけど、そんなとこか。

目的も定まったので、さっそく移動することにする。

「改めて見ると、この場に留まってること自体が危険だったな……

血の匂いがたちこみすぎてる」

頭も働き、心が落ち着いてくると、様々な感覚が鋭敏になってくる。

そして自分が奪った命の感触も蘇ってきた……

まぁ……あの場合は仕方なかったよな。
それに今さら後悔しても遅いか……
そう思うことにして意識を切り替える。
気のせいか、なにやら複数の気配がこちらを伺っている気もするので、早々に移動を開始する。

再び携帯の光を頼りに夜の河原を下る。

環境に慣れたのか、多少の空腹と渇き、疲れを感じるが足取りはまだ軽い。

そう思いながらしばらく移動していると、空も明らんできた。
「あっちから太陽が昇るってことはあっちが東なのかな……」
などと呟きつつ、さらに移動していると……

「あっ！」と思わず声をあげてしまうほどの光景が目の前に広がった。

そこには広大な湖が広がっていた。

河口付近が森の出口のようで、湖の向こう側は草原のようになっている。

ちょうど俺が歩いてきた川に対して湖を中心にYの字でさらに川が流れているようだ。

ひとまず森を抜けれた安堵感が半端なく、思わず「いやっほーい」と叫びながら湖の外周を走ってしまった。

ひとしきり、はしゃいだ後に「結局、水も食料もないし、死ぬ一歩手前なのは変わらないな……」という事実に気づくまで……

1時間ほどで休憩と仮眠を済ませたくらいに、携帯の電池が切れた。

ここまでよくがんばってくれたなぁ……という感慨と、このまま夜になったらマジでやばいという不安が同時にわき上がる。

まぁ～いちいち不安がってもキリがないし、とりあえずどっちに進むかを決めるかな……

もちろんどっちの川づたいを行くかってこと……だが……

「ん？あれは？」

俺の視界が上空に揚がるあるモノを捉えた。

俺が見るのは今まさにどっちに行こうか迷っていた川の一方の先であがっている白いモヤだ。

あれは……煙？もしかして人がいるのか？

逸る気持ちを抑えながら、柔道着片手にそちらに向かって走る。

Yの字の左の川沿いを10分ほど走ったところで少し先に人影が2

人、たき火を囲んで座っているのが見えた。
俺はもう、うれしくてうれしくて仕方なく、大声で「おーい、おーい！！」と呼び掛けながら、右手をブンブン振った。
その２人はすぐ俺に気づいたようで、立ち上がり、一方は槍を、一方は短剣を２本それぞれ両手に持ち、こちらに向かって構えをとる……そして……
「とまれ！！それ以上近づくな！！」
と…ってえぇぇぇぇ！？まさかの威嚇！？
いやいやいやいや、なんで！？なんでそうなるんすか！？
っと驚愕しながら俺はその場に足を止める。
「あのーーすいませーーん！俺、一般人でーーす！遭難者でーーす！助けてくださーーい！」
だいたい、６、７０メートルぐらい先にいるお二方に、俺は必死の救難信号を送る。
そんな俺に対して全然警戒を緩ませることなく、２人組の一方が俺に声をかけてくる。
「お前、どこの種族の者だ？ハーデスか？なぜあの森の方から現れた！？冒険者ならギルドカードを見せろ！！俺達に近づいてきた理由はなんだ！？」
いやいやいや、何言ってんのあの方！？しかも質問の数多いよ！？
そんな悪いことしたか俺！？

「ちょちょっと待ってくれよ！！あんたが何言ってんのか全然わかんないんですけど！！とりあえず俺は単なる善良な遭難者なんだよ！！いきなりあの森にほっぽり出されて、命からがらやっとここまでたどり着けたんだよ！助けてくれよ！見ればわかるだろ！？武器どころか飲み水もないんだぞ！！」
と叫び、俺はその場で両手を挙げながらグルッと回った。

すると向こう側で何やら話し合いが始まったようで、俺はポツンとそれをしばらく眺める羽目になった。

こりゃダメかな？と泣きそうな気分になってきた頃、何やら結論が出たようで、２人がこちらを向く。

「わかった。とりあえずゆっくりこちらへ来い！！その代わり、少しでも妙な仕草をしたら……わかってるな！！」

「え？……あ、あぁ……わかってる」
よっしゃあっっっ！！
あぁ～よかったぁ……これでまたこんなとこに置き去りにされたら洒落にならなかったぁ……
ホントよかったぁ……

俺は胸の内に込み上げてくる安堵を痛いほど感じながら、（たぶん）恩人（になってくれるであろう）２人に向かって歩いていった。

6（前書き）

拙い作品ですが、よろしくおねがいします。

6

俺はオタクではないと自負している。
それは決して彼らを否定的に見ているからではなく、どちらかというと敵わないというある種の畏怖の念からきている。

とはいえ、一般人であるかと言えば、それも微妙だ。
マニアックな漫画も読むし、ライトノベルも読む、アニソンで熱くなれるし、アニメやエロゲーで泣いたことだってある。

だが、オタクほど収集物も持ってないし、知識もない、イベントとかにも全く行かない。

っというかなり中途半端でどっちつかずな奴なのだ。
つまりまぁー何が言いたいかというと、「そういう知識」がある程度実装されているのが俺だということだ。

そして、そんな俺だからこそ半ば確信を持ちつつも否定し続けていたある考えがある。

「ここ……異世界じゃね？」

まぁー昨夜襲ってきた化け物でほぼ確定っちゃー確定だったんだが、中途半端な俺としては、それを受け止める勇気が全くもってなかったんだ……

だがしかし……

これを目の前にしてしまったらもう駄目だ……

いくら俺でも諦めるしかない……

「い、犬耳と猫耳……」

俺の目の前には、たぶん獣人と呼ばれる方々が2人もいらっしゃる。

泣いても喚いても、これが現実なのだろう……

「何か言ったか？」

槍を構えたままそう問いかけてきたのが、犬耳の方だ。どうやら男性のようだ。

こちらへの警戒心が丸出しすぎて俺の心が折れそうだ。たぶんさっきまで大声張り上げていたのもこいつだろう。

もう一方の猫耳の方は、短剣を逆手に持ってはいるが、腕は下ろしていて自然体だ。

身体つきや鎧の形状からも女性だとわかる。結構美人だ。

2人とも、顔つきがなんとなく犬っぽいとか猫っぽいというだけで、単純に犬や猫が二足歩行になっているというわけじゃない。

体毛とかは服やら鎧で確認できん。

俺がボォーッと2人を観察していると。

「それで、お前は何者なんだ？なぜスプリガンの森から歩いてきた」

犬耳が俺にそう問いかけてくる。

さて、なんて答えよう……
正直に異世界から来ましたとか言ったら状況が悪化しそうだ……まぁーベタだがこれしかないだろう。

「実は俺、記憶がないんだよ。覚えているのは名前だけで、さっきもちょっと言ったけど気づいたらあの森にこれと一緒にほっぽり出されてたんだ。」

左手に持った柔道着を持ち上げながら、胡散臭いことこのうえないセリフを吐く俺（苦笑）

案の定2人とも訝しげな表情をする。
そして犬耳の方がなんか言いかけた時

「ルー、相当怪しいけど、嘘を言ってる風でもないわ。ここはまぁー助けてあげてもいいんじゃない？こんなボロボロの子を見捨てるのも後味悪いじゃない。」ルー（たぶん犬耳のこと）の左肩に手を置きながら、猫耳の彼女がそう言った

め、女神だ……

俺が両手を合わせ、ひざまづいて感謝しそうになったとき、彼女はこちらに目線を合わせ

「あんたも、自分が相当怪しいのくらいわかるでしょ？大人しくしてれば近くの村までくらいは連れてってあげるわ。でも、肝に銘じておきなさいよ？なんか怪しいことしたら容赦なく殺すからね？」

「……りょ、了解っす」

俺は涙目でうなずくほかなかった。

その返事に不承不承といった体だが、一応納得してくれたようで、ルー君もずっと俺に突きつけていた槍を下ろしてくれた。

「さぁ！そうと決まったら朝ごはん食べましょ？あなたももちろんいるでしょ？」

待ってましたこの時を！！

実は彼女達の後ろで刻一刻と鍋に入ったスープ的なものがグツグツいっていて、すきっ腹には罪な匂いをさせているのだ。

俺は、心の中でガッツポーズをとりながら

「はい！いただきます！」

と返事をする。

そんな俺を尻目に食事の準備にとりかかる2人。

この世界に来て初めての食事に胸を踊らせつつ、2人へ手伝いを申し出るのであった。

7（前書き）

未熟すぎる作品ですが、よろしくお願いします。

7

朝日が昇った草原地帯を草花と踊るように爽やかな風が舞い踊る。緑の色彩鮮やかな大地に、一筋の清流が駆けている。なだらかな白藍が奏でる音と川面を撫でる風の音律は、聴く者全ての胸に、安らぎを運ぶことだろう。

俺は今、激しく掻き乱されていた……。

俺の目の前でたゆたう湯気と香りに……そして、それを生み出している一杯のお碗に満たされた豆スープにだ！！

「う、うますぎるぅぅぅぅ。こんなにうまいメシを食ったのは初めてだぁあああああ」

朝の草原に俺の叫びがこだまする。

「お、大袈裟ねぇ……ほら、こっちは冷たい水ね」

カップを渡されてすぐ、俺は一気にそれを飲み干す。

「くぅぅぅぅ〜〜んはぁあ！！うまい！！最高だ！！」

「そ、そう……」

2人はかなり引いているが、そんなのおかまいなしだ。

俺は今、生きていることを実感している最中なのだから！！！

そのままスープをかきこむようにして飲む！味は薄いし具は豆だけだが、色んな意味で極限状態だった俺には、温かいスープが胃やら心やらに染み通った。

おかわりをもらい、それを全て胃に納めると、やっと人心地つけた。あぁ……頬を撫でる風が気持ちいいなぁ……

「いい顔しているところ悪いんだけど、片付け手伝いなさいよね！ほら、食器とお鍋、川で洗ってきてよ。それが終わったら準備して移動するわよ。」

「え……あっはい！すいません」

渡された鍋やら食器を抱えて川の方へ向かい、ジャバジャバ水洗いを始める。

「しかし異世界かぁ……どうすっかなぁ……帰りたいけど、世界間の移動とか個人がどうこうできるレベルの問題か？俺には螺旋力も天使の落とした白金の本もないんだぞ……」

アニメやらマンガやらラノベやらでは珍しくない異世界への移動も、自分に起こるとその果てしなさの前に愕然とする。

「なにこの無力感……くつがえしようがなさすぎて逆に平静でいられるんですけど」

ファンタジーものではよくある何かしらの超常的な力も今のところ全然顕現しないし、どうせーっちゅうねん……泣けてくるわ！！

なんとなく関西弁で現状を嘆いてみたところで、洗いものも終わる。
洗ったものを抱えて、２人のとこまで戻ってくると、すっかり準備が整っているようだった。

「遅いぞ、皿を洗うだけでどれだけ時間をかけてるんだ」

イラッときたが、ここは我慢我慢……なんせメシまで食わしてくれて、なにやら近くの村まで連れてってくれるという恩人なのだ……

「す、すいません……ちょっと考え事してたもんで……えへ、えへへへ」

「ルー、つっかかんないの！ありがと、鞄にしまうからちょっとそのまま持っててくれる？」

と言うと、猫耳さんが鍋から順に自分の肩から提げている鞄にポンポン入れていく。

……ふむふむ

まぁーね……

いやいや、わかってましたよ？うすうすだけどさ……

だってまぁー異世界で怪物や獣人さんがいるわけでしょ？

しかも獣人さん達ってば槍やら短剣やらを装備して、（多分だけど）皮の鎧で上半身を覆っているという戦士ルック。

もはやここまで王道ファンタジーなら、例のアレがなきゃ、もはや成立しないって感じですよ。

「あ、あの……そのバッグってもしかして魔法？的ななんか特別な力が掛かってたりします？」

そうなのである。先ほど鍋やらお碗やらを入れたバッグ……奴は一見するとちょいファンキーな皮のショルダーバッグって感じなのだが、どう考えても鍋と3人分の食器は用量的に入らない大きさなのである。（横×縦＝３０×２０ぐらいかな？）

「あぁこれ？そのマホウ？ってのはよくわからないけど、確かに神術が施された特別製ね。心力（しんりょく）を定期的に込めて、術が解けないようにしてれば、物が無限に入るバッグよ。結構高いけど人気の品だし、初めて見るのも不思議じゃないかもね。ってそういえばあなた記憶がないんだっけ？」

やべ……この世界じゃ常識的なことなのかやっぱ……ここは勢いでなんとか押し切るしかないな。

「そ、そうなんですよ！なーんか記憶が曖昧で！！やべぇなぁ……頭でも強く打っちゃったかなぁ……あは、あはははははは」

「そ、そう……あなたも大変ね……」

くっ……ごまかすためとはいえ、このドン引きされてる感じと、憐れみの目は心にめっちゃ刺さるなぁ……泣くな！泣いたら負けだ！

「おい！そろそろ行くぞ！」

なんとなく気まずい雰囲気が漂った俺と猫耳さんだったが、ルー君のその一声に助けられ、そちらに向かう。グッジョブ！ルー君！

「ごめんごめん！さっ！あんたも行きましょ？村までだから短い間だけど、よろしくね！」

ウィンクと共に向けられたそのセリフに一瞬ドキドキしてしまいながら

「こちらこそよろしくお願いします。」

と俺も一礼して、その2人について行く。

「足手まといになるなよ」

大丈夫……村までの我慢だ……

8（前書き）

未熟すぎる作品ですが、よろしくお願いします。

8

見渡す限り草原である。
所々に木が生えていたりするが、ほとんどが足首くらいまでの草花で地面が敷き詰められている。

こういう風景、やっぱ新鮮だなぁ……とシティ派な俺は感じる。風もうまいなぁ…

いやいや……なに観光気分でちょい癒されてんだよ……異世界だぞ！観光どころか、遭難してんだよ！

はぁ～……異世界かぁ……落ち込むわぁ……

まぁでも、全く希望がないってわけでもない。

さっきなぜか焦って記憶喪失キャラを押し切ったせいで詳しく聞けなかったが、どうやら「しんじゅつ」とかいう魔法的な力があるようだ。

世界間の移動なんてファンタジーな現象に、その力が無関係とは考えにくい。

すぐにはどうにかできないだろうが、この世界でとりあえず生き残って、その力について情報を集めれば、帰る目処もたつかもしれない。

というところまで考えて、「フッ」と笑ってしまう。
決して楽しいことばかりあったわけじゃないし、不満やらなんやら

あの世界にはたくさんあった。ほぼ毎日文句を言っていたし、恨んだことだってあったはずだ。

それなのに、なんだかんだでやっぱり帰ることは諦められない。まだやり残したことが向こうの世界には山ほどあるのだ。

改めて思い返すとやはりあの世界の日本という国が、そして自分を待つ人たちがいるあの場所こそが、自分の故郷なんだな。と強烈に意識してしまう。

そんな郷愁の念と、そこへなんとしても帰りたいという目的意識がはっきりすることで、心と身体に熱が籠っていくのがわかる。

それにまぁ、この世界で生き残ることが修行になるかもしれない。強くなるための糧だと思えば、大概のことは苦ではないと思えるだろう。

うん、決まったな！
最終目標は帰ること。
そのためにこの世界で情報を集める。
そして、強くなる！！
まぁーこんなとこか。

我ながら単純すぎるが、わかりやすく大変よろしいだろう！

さてと、んじゃひとまずこの世界の常識を知ることから始めますかな。

猫耳さんならまぁーある程度は教えてくれるだろ。村とやらに着けば当分会うこともないだろうし、形振りかまわず色々聞いてみるか

な。

俺たちは今、逆三角形の配置で歩いている。ちなみに前方右が猫耳猫尻尾、左が犬耳犬尻尾である。
猫尻尾は手触りの良さそうな毛並みでニョロってる。
犬尻尾はフッサフッサな感じだ。

２人共、後ろから改めて見ると、やはり迫力がある。俺の身長が１７２ｃｍなのに対し、２人共１８０くらいあってデカいし、体格もガッシリしている（猫耳さんは無駄な肉がない感じ）。
出来れば一度手合わせしてみたいなぁ……
まぁーそれはまた今度だな。とりあえず自己紹介あたりから始めて、色々聞いてみるかな。
「あの」
っと俺が猫耳さんに話しかけようとしたときに、猫耳さんが「そういえば」と呟いて、こちらに目配せしてきた。

なんだろうと思っていると
「自己紹介がまだだったなーと思ってね」

「そんなもん必要ないだろ、どうせ村までの付き合いだ」

「まぁーいいじゃないの！どうせ村まで暇なんだし！それにルーがムスムスしてるからつまんないのよ～」
「……ふんっ」

「も～～。ごめんね、こいつハーデス族の奴とちょっとあってさ、まぁー根は良い奴だから気にしないでよ」

「あ、あーはい」と苦笑しながら返す。

「んで、自己紹介ね。私はリン。こっちはルーカスね。」

名字を言わないってことは、あんまり名字は一般的でないってことなのかな。それとも伝えたくないのか……まぁー考えてもしゃーないか、とりあえずこっちも名前だけでいこう

「ユウです、よろしくお願いします。」

「別にそんな畏まらなくてもいいわよ（苦笑）私もルーも、しがない流しの冒険者でしかないんだし」

「いや～さすがに命の恩人に対しては丁寧になっちゃいますよ」

それを聞くと、リンさんは呆れた表情をして

「まぁ～好きにしてちょうだい。別に気にしないからさ」

と言ってくれる。

この人さっぱりしててホントいい人だな～。可愛いし、絶対モテるだろ。

出会い頭に「殺す」発言かまされた時にはどうなるかと思ったけど、無駄に緊張する必要もないな。

「了解です」

俺の緊張がほぐれたのがわかったのか、おどけた感じでリンさんは尋ねてくる。

「あんた、自分のこととかどんくらい覚えてるの？」
おっ、向こうから聞いてきてくれたか、こりゃ好都合だな。

「自分の名前とかできることなんかは覚えてるんですが、あとは全然ですね（苦笑）この辺の地理とかはもちろん、世界についても地理やら政治形態やら流通貨幣やら全然覚えてないです。あと、冒険者ってのはなんか組合みたいなのがあってそこに所属してるってことですか？僕にもなれますかね？それと、ハーデス族？ってなんですか？種族って色々あるんですか？あー、あとしんじゅつ？についても教えてほしいです！」

と早口に捲し立てた俺を見てリンさんが

「ちょっ！ちょっと待って！！いきなりそんなに聞かれても答えきれないわよ！ってか、あんたかなり重症ね……どれもこの世界の常識についてじゃない……」
かなり可哀想な人を見る目だ……だがしかし！めげるわけにはいかないのだっっっ！！

9（前書き）

未熟すぎる作品ですが、よろしくおねがいします。

9

「はぁ……まぁーここで遭ったのも何かの縁だしね。いいわ、村に着くまでなら質問に答えてあげる。でも、私だって知らないことがあるし、詳しく説明できないものだってあるから、その辺は諦めなさいよ？」

そう苦笑しながら俺の質問に応じる姿勢を見せてくれたリンさんに感謝しつつ、質問していく。

「ありがとうございます。ホント助かります（涙）」

「まず教えて欲しいのが、お二人は冒険者だって言ってましたけど、それって自称ですか、それとも職業として成立してるんですか？」

「まぁーギリギリ職業っていってもいいのかなぁ…世界政府ってのがあってね、そこが冒険者ギルドってのを運営してるのよ。そこに登録すると、ギルドが仲介者になって仕事を卸してくれるってわけ。もちろん登録は誰でもできるし、支部も結構あちこちあるわよ」

なるほど、大体予想通りの仕組みだな。

誰でも登録可能ってのはデカい。

異世界でいきなり路上生活者になるとかマジ勘弁だし（苦笑）

それに一ヶ所に留まって仕事をするよりも、あちこち周った方が情報も集まるだろうし。

「うーん……僕もその冒険者になりたいと思うんですが、仕事って選べるんですか？一応武術の心得があるんですが、いきなり物凄い怪物と戦うとかは無理だと思うんですよね」

「それが一番無難かもねぇ……記憶もない素性の怪しい奴を雇ってくれるとこなんてそうそうないだろうし（苦笑）まぁー安心して、ランクってのがあって最初は一番下のEから始まるんだけど、このクラスは見習い扱いだから、そうそうきつい仕事はまわされないわよ。その代わり報酬も安いけどね」

よしよし、まぁー最初は生活が苦しいかもだが、なんとか生きていけそうだな。

「ちなみにリンさん達のランクはどこなんですか？」

そう聞くと、リンさんはニヤニヤしながら振り返り

「私とルーはねぇ…なんと上から2番目のAランクなのよー？むっふっふー」

と口に手をあてながら完全な自慢をしてきた。

子供か！！お約束で尻尾がユラユラ揺れちゃってますよー！！

と思いつつも……

「えぇぇぇぇ！？めちゃめちゃすごいじゃないですかぁあああ！！かっこいーなぁお二人とも！！」

日本人の美徳を忘れてはいけないよね？まぁーホントに驚いてもいるしね。

「そうでしょー？尊敬してくれてもよいのよー」

むっちゃ胸張って喜んでる……褒めた甲斐がありすぎるんですけど！

……ん？えっっっ！？

俺はその時、まさかの光景を目の端で捉えてしまっていた……

ルーカスさん……尻尾が左右にめっちゃワッサワッサなっとる……

この人……リンさんの言う通り……いい人なんだな……

ルーカスさんへの評価がグングン上がっていく中、それを表に出さないよう「冷静に冷静に！」と心の中で唱えながら次の質問をリンさんにする。

「高ランク冒険者のリンさんにお聞きしたいんですが、お金の単位と価値を教えてもらえないでしょーか？」

リンさんはかなり上機嫌に答えてくれる

「お安いご用よ！！」

と言い放ち、例のショルダーバッグから折り畳みの財布を出してきた。

「お金は紙幣っていう種類で３つ、それから硬貨で６つ。単位はネスよ。これが１万ネス、こっちが５千、んでこれが千。硬貨は順番に５００、１００、５０、１０、５、１よ」

偶然の一致にビビるな……日本円と色やら形やらは違うが数字の区切り方とか一致する箇所がめっちゃある……すげー覚えやすい……あざっす！

「大体、安宿で一泊５～６千ネスくらいで、普通のが１万くらいね。

外食するなら一食が大体５００～千ネスくらいかしら。んで、見習い冒険者が１日で稼げる報酬が大体１万～１万２千くらいかしらね」

「それならなんとか毎日、屋根のあるところで寝れそうですねー」

「まぁーねぇ。でも戦闘系の依頼をこなしたとして、そこまで大変なものはないけど、やっぱりそれ相応の装備を整えなきゃならないし、それを維持しないといけないわけだから、最初は苦労するかもしれないわね（苦笑）雑費ってのは結構嵩むもんなのよねぇ……」

経験者は語る……だな。金のやりくりはその時になってから考えるとして

「この世界の貨幣は統一されているんですか？どっか違う国ではお金が違うとかってあります？」

「大昔はあったみたいだけどねー７部族の首長が世界政府を創設したときに銀行ってのが生まれたのよ。その時に貨幣は世界共通になったらしいわ」

なるほどな……結構、安定的な体制を作り上げているんだなこの世界。ナイスだぜ！

心の中で誰かに親指を立てつつ、さっき出てきた７部族の首長について聞いてみることにする。

「その７部族っていうのはなんなんですか？」

この質問はしなきゃよかったと後悔した……

なんせ前のお二方共「ピタリ」と歩くのを止め、こちらに振り返り、俺を「じぃぃぃぃぃ」と睨み付けてきたのだ。

そして

「……はぁ～～、あなたってホントにこの世界の人間？」

ドキッッッッ

「ななななななな、何言っててててんすかリンさ～ん、ああ当たり前じゃないすかぁ～」

動揺しすぎだ俺……

「何そのあからさまな動揺……ふぅ……まぁーいいわ」

と渋々納得してくれたリンさんは、再び前を向き、歩き始める。

もちろんルーカスさんもだ。

ルーカスさんは振り向き様にかなり困惑した目を俺に向けてきた。

だが何も言わないところを見ると、もはや俺のことは完全にリンさんへ丸投げしたようだ（苦笑）

１０（前書き）

未熟すぎる作品ですが、よろしくお願いします。

10

「7部族のことだけど、細かいとこまで話し始めるとかなり時間かかるから、はしょって要点だけ話すわね」

どうやらド常識中のド常識を質問したみたいだなぁ……そりゃ呆れられてもしゃーないわ……だが負けん！！

ここで聞いとけば、この世界にいち早く馴染めるはず……ってかそう何度も何度もこの心を抉るような視線と雰囲気に晒されてたまるかよぉぉぉ（涙）。

「よろしくおねがいしまーす」

リンさんは歩きながら左手をパーの形にして肩の横まで挙げ、親指から順に折り曲げ始める

「まず、それぞれの部族名ね。ドラグーン・ウンディーネ・ケットシー・ドワーフ・ライカンスロープ・エルフ・ハーデス。それぞれの大まかな特徴はドラグーンが背中に翼、ウンディーネが両手両足に水掻きと首横の当たりにエラ、ドワーフが低身長に長いヒゲ、エルフが長い耳、ケットシーが私みたいな猫耳猫尻尾、ライカンスロープがルーのような犬耳犬尻尾、んでハーデスは……」

と言葉を区切りながらリンさんが振り返り、後ろ歩きしつつ、小指と薬指のみ立てていた手で俺を指差し。

「あなたみたいに特にこれといった特徴がない」

ちなみにリンさんがルーカスさんを例に犬耳犬尻尾と言った直後、憮然として「俺のは狼の耳と尻尾だ」と主張していたが、リンさんは軽くスルー（苦笑）なんかこの二人の力関係が完全に見えてきた

なぁ……

リンさんが再び前に向き直るのを見ながら、俺は今の部族名とその特徴を忘れないよう、頭に叩き入れた。
ハーデスってのは1部族の名前だったんだな……しかも外見的特徴に俺が当てはまるわけか……

一瞬、ルーカスさんを見る。

「それぞれの部族は【始まりの七神】が生み出したと言われていて、それぞれの神像が祀られている神殿を守るように都市を築き、そこを首都として、国を挙げて守護しているってわけ。そしてその国の首長こそが世界政府の1幹部となるわけね。ここまではわかった？」

どうっすかなぁ……これ聞いたらまためんどくさいことになりそうなんだよなぁ……まぁーでも……今さらか……

「あ、あのぉ～う……【始まりの七神】とは？」

二人とも今絶対肩をピクッってさせた！！絶対今ピクッってした！！……うぅ……いたたまれないよぅ……この時の極度のストレスがのちに俺の頭髪へ多大なるダメージを……ってなるかぁあああ（血涙）

「はぁ……えぇ～っと……【始まりの七神】ってのはね、この世界が生まれたのと同時に顕現されたと言われている存在よ。そして、それぞれの神々はそれぞれの部族を生み、世界の運営を任せたと言われているわ。具体的に言うと

光の神はエルフ（アマテラス）
闇の神はハーデス（ツクヨミ）
雷の神はライカンスロープ（ミカヅチ）

風の神はケットシー（ミナカタ）
火の神はドラグーン（カグツチ）
地の神はドワーフ（イザナミ）
水の神はウンディーネ（イツキ）
といった具合よ。まぁー運営どころか、神々がその身を神像へ宿らせ、世界への干渉をされなくなった当初は、全部族で世界大戦とかおっぱじめたらしくって、グダグダだったみたいだけどね（苦笑）」

両肩を持ち上げ、両手を広げたポーズをしながら呆れてるリンさん。

まぁー肌やら目の色は違うけど、同じ「人間」しかいないのに、世界大戦起こしてしまってるトコからやってきた俺としては、なんとも言えない心境だ（苦笑）

しかし神が実際に存在したとされてるってことなのか？さっきは神像を祀った神殿を中心に都市が作られているみたいなことを言ってたし、その辺はやっぱ聞いとかなきゃな。

「神々がその身を宿したとされてる像ってのはやっぱりすごく大切なものなんでしょーね？」

「そりゃーね。各部族の象徴なわけだし、神術を使うには、神像から加護を得なきゃならないわけだから必死よ。
実際、大昔には戦争を見かねた神々が誰にも加護を授けなくなり、元々加護を得ていた人からも剥奪しちゃったから大混乱になったらしいしね。それで自分達の過ちを省みた各部族の首長達が戦争を終結させて、世界政府を作り、永遠の講和を神々に約束してやっと許してもらったらしいわ」

出たな「しんじゅつ」、この場合、神の術で神術とでも言うのかな

……とにかくきちっと情報収集しないとな

「戦争を止めちゃうほどの混乱って想像がつかないですね……神像の加護がないとまったく神術は使えないんですか？」

「まぁー大昔とはいえ、やっぱり生活の要所要所に神術は関わっていたし、戦場ではもちろんのこと、魔獣への大きな戦力にもなってたわけだしね。

そりゃもう大混乱よ（苦笑）今の時代なんてさらに依存してる部分があるから、絶対に加護を失うようなことはできないわね。

んで、今の話からもわかる通り、加護なしで神術を発動することは絶対に不可能よ」

リンさんは歩きながら後ろの俺に見えるように手を揺らす。

「神像から授かる加護って大切なんですねぇ」

知った風な口でしみじみ言ってみる。

「まぁーね（苦笑）いきなり神術が使えなくなることに世界中の人が怯えてるくらいには大切ね」

そりゃまぁそうだよなぁ……便利なものに弱いのはこの世界の人達も一緒ってことか。

にしても、神様が実際に居て、力を与えてくれる世界か……ますますファンタジーだな（苦笑）

んで、やっぱどうみても神術ぐらいしか今のところ世界間移動に影響を及ぼしそうなものはないよなぁ……まぁーまずは生きていくこ

とからだから最初は後回しになっちゃうだろうけど、少しずつでも神術や神について調べていくのがよさそうだな。

「ちなみに人をある場所からある場所へ瞬時に移動させる術とかあります？」

俺の質問に首を傾げるリンさん。

「うーん……そういう術の研究を誰かがしてるかもしれないけど、実用化されたって話を私は聞いたことないなぁ……何？あんたもしかして、そんなトンデモな術に心当たりでもあるわけ？」

後ろに目配せしてきたリンさんの目が結構鋭くちょい怖い

「いやいや、もしあったらいいなぁーとかなんとなく思っただけですよ～～」

「ふ～～ん……あんまりそういうことは私達以外の前では言わないことね。ただでさえ、怪しいんだからあんた」

「うぃっす……肝に銘じておきまっす」

冷や汗を滲ませつつ、気持ち前傾姿勢でトボトボ歩く俺……癒しがほしいなぁ（涙）

１１（前書き）

こんな未熟な作品を読んでくださる方々に熱く御礼申し上げます。
大変励みになっております。

※昨日の午前中に投稿した１０話ですが、午後に多少ですが、編集
し直しました。申し訳ございません。

11

心がズタボロになるのを構わず、必要そうな情報集めを断行した結果、死にたく……

いやいや！ついさっき生き残るって誓ったばっかじゃないか……がんばれ俺！負けるな俺！！

まぁーとりあえずはＬｖ１の勇者がこれから旅に出るくらいには情報が集まったと思う。

ぼんやりとだが、村に着いて、この２人と別れた後もなんとか１人でやっていけそうだなぁ～と、寂しさを感じながらも考えれるようになった。

結局、かなりの恩人と化したなぁ……この２人。いつか恩返しでもできたらいいけど……

そんな日本人らしい奥ゆかしい思いを俺が胸に抱き始めた頃

「ん？なんだ？」

晴れた日の爽やかな草原には似つかわしい、ドロドロとした殺気を放った何かが後方から近づいて来るのを感じる。

俺がそれを察知し、立ち止まって後ろを振り返ると。

「あら、あんたも気付いたの？まだ結構遠くにいるのに大したもんじゃない。

武術の心得があるってのは嘘じゃなかったのね」
首だけ後ろに向けると、リンさんもルーカスさんもこちらを向いてその何かが来る方向を眺めていた。
「リン、どうする？」
「ルーはどうしたい？」
「ゴブリンの集団だな……今の状態で、この数を相手にするのは、なかなか骨が折れそうだ」
「そうねぇ……でもここで放置して村でも襲われたら、結構笑えない被害が出ちゃうだろうし……それに狙いは私達かもしれないしね。いずれにしても戦うしかないんじゃないかしら」
暢気な……
この場面でさっきまでと同じペースと雰囲気でしゃべる2人に俺は呆れていた……
なんせどんどん濃くなるこの殺気は、間違いなくこちらに向かって来ていて、俺達は確実に襲われる側なのだ。
蹂躙を目的とした、剥き出しに放出されているソレを浴び続けながら、あの落ち着きっぷりはさすがAクラスってことなのだろうか。
ってかなんでまだ見えてもいないのに相手が何者か判別できてんだよ……ゴブリン？
それってファンタジーもので定番のあいつらか？

もし俺の想像が当たってれば、森で襲ってきた奴らのことな気がする。

んで、もしそうなら俺も戦える。

ゴブリンについて詳しく聞いておくべきだな。

そう思い、俺は2人の方へ振り返る。

って……え？……ま、まさか……いやいや……つまりこれがAクラス冒険者の実力ということだろう……

2人が話している様子はいたって普通だ。

ひっきりなしにピクピク動いている耳を除けば……

さ、触りたい尻尾もさることながら、あのピクピクしてるの触ってみたい！！

うぉぉぉぉ……今は我慢だ……そんな場合じゃないしな。絶対怒られるし。

だがまぁ……いつか必ずこの野望は叶えることを誓うぜ……熱く萌ゆるこの胸にっっっ！！！

俺が1人で悶え苦しんでいると

「こいつはどうするんだ？足手まといのお守りなんて俺はごめんだぞ？」

とルーカスさんが俺を見て言う。

この人に関しては実はいい人なのがすでにバレているので、もうイラッとくることがない。今の言葉だって、俺のことを心配していると取れなくないし……たぶん

「もー、ルーもそこまで意固地になることないじゃない……まぁーでもそうね、多少戦えるようだけど、この数を相手するのはきついだろうし、先に村に向かってもらおうかな？このことを伝えて、援軍を呼んできてほしいし」

あー、このパターンかぁ……でも個人的にはここでこの世界の「戦闘」ってやつを見ておきたいんだよなぁ……神術だってどういう感じなのか気になるし。

それに、この恩人2人を置いて俺だけ安全な場所にいるってのはやっぱり男として納得できない。

ちょっとだけ粘ってみるかな……それでもダメなら諦めよう。粘りすぎて行動が遅くならないようにしなきゃな。

「あのー、数はどのくらいなんですか？」

リンさんは自分の提案に質問で返されたことを多少訝しんだが、答えてくれた。

「ん？うーん……まぁー大体7～80ってとこかしらね」

「リンさんとルーカスさんはAクラス冒険者ですよね？お二人でもその数はきついんですか？」

と言った瞬間、「ヒュッ」と槍の穂先が顔の目の前まで飛んできた。

「調子にのるなよハーデス野郎。お前がいなければ、あの程度の雑魚が何匹居ようと蹴散らせる」

それはつまり俺のことを心配してるってことなんですが……憎めないなぁ（苦笑）

それにハーデス野郎って悪口として成立しなくね？

と思いながらも、ルーカスさんの目を見ながら俺は訴える。

「なら、俺に気を使うことなんてありません。心配してくれるのはありがたいけど、恩人2人を置いて俺だけ逃げるなんてできません！もし俺がここで死んだとしても、それは俺の責任です！足手まといにはなりません！俺も戦わせてください！！」

言いながら、頭を下げる。

「ふぅ～ん……」

とはリンさん

ルーカスさんは無言だが、槍は引き戻してくれた。

「ルー、どうする？」

ルーカスさんは歩き出し、俺の横を通り過ぎる。

「ふん、好きにしろ、だがもしお前が奴らに殺されそうになっても、俺は助けないからな」

通り抜け様にそう言ってくる。

「も～、素直じゃないなぁ……まぁーそういうことらしいから、わざわざ死ぬかもしれない場所に留まりたいなら好きにすればいいわ。でも、戦うのなら、必ず生き残りなさい？こんなところで死なれたら、後味悪くて腹立つし」

とリンさんも歩き出し、通り抜け様に、俺の肩に手を置いて、そう話しかけてくれた。

そんな2人の背中に向かって

「ありがとうございます！」

と声をかけ、後を追う。

１２（前書き）

未熟すぎる作品ですが、よろしくお願いします。

12

目の前に広がるゴブリンの群れが、1つの塊のように殺気を向けてこちらに近づいて来る光景は、今まで見たどんなにグロいモノよりも鳥肌が立つのを覚えた。

「おーおー血走った目しちゃって、ただでさえ不細工なツラしてんのに、勘弁してほしいわー」

右の手のひらを顔の前で水平にかざして、眺めてるリンさんは相変わらず暢気だ……

「ゴブリン単一の集団か……1つの巣にいた群れがまるまる移動してるのか？」

ルーカスさんは冷静に考察を始めた。

「あのー、もう結構目と鼻の先まで来てるんですが、なんか作戦的なものってあるんですか？」

俺が尋ねると、リンさんが

「うーん、そうねぇ……って言っても、私達、今結構消耗してて、でかい術使えないのよね。特に私は（苦笑）だからまぁー中っくらいのをまずルーがぶつけたら、ひたすら各個撃破しかないのよね（笑）ファイト！！」

と俺に親指をグッと立てた左手を見せ、笑顔で話すリンさん。

それ作戦って言わねーし！！ってかそれを2人でやろうとしてたわ

け？どんだけだよ！！

まぁーいいや、幸い、ゴブリンは森で遭遇したあいつらのことだったから、３人でカバーしあいながら戦えば、かなり数は減らせるだろう。

足手まといにはならないよう気を付けるしかないな。

「ま、まぁーできるだけがんばりまっす……」

項垂れつつ返答する。

「んじゃそろそろ行きますかー。ルー、とりあえず一発よろしくねん！！」

リンさんがルーカスさんの肩をポンと叩くと、ルーカスさんが右手に持った槍を脇で挟むように引き、半身になる。そして左手をゴブリンの群れへかざすと……

パッと光がその手の平から放たれ……

ズガァァアアアアン

という雷鳴と共に一筋の稲妻がゴブリンの群れを襲った。

いやいや、あれで中っくらいかよ！！一撃で１０～１５体くらい黒焦げになってんじゃねぇか……自然災害が襲ってくるとか、神術マジパねぇっす……

「み、耳が……」

俺が両手で左右の耳を押さえつつ、そうこぼしていると

「んじゃ！おっ先～～」

とリンさんが短剣を2本、逆手に持って突撃していった。

それを追って、ルーカスさんも両手で槍を持ち直しながら駆ける。

いやいや……え？……マジで各個撃破でいくの？お互いカバーとかしあわないのかよぉぉぉぉぉぉぉぉ（涙）

なんてね……まぁーなんか薄々わかってましたよ。

だってそのへんの打ち合わせ全然なかったし、ルーカスさんに至っては「助けないからな宣言」されてますしね……ホントは俺のこと好きなくせにさ……

ヒュゥ……バチィン！！

足元に雷撃らしきものが弾ける。

「うぉわっっ！！あぶなぁぁ！？」

何してくれてんのあの人！？流れ弾？流れ弾だよね！？

思わずルーカスさんの姿を探す。

うはぁ……なんだあれ……やっぱめっちゃ強いんだなぁ…あの2人、リアル無双乱舞じゃん……

ルーカスさんは槍を手足のように操ってゴブリンを蹴散らし、リン

さんは短刀の二刀流で踊るようにゴブリンの首を飛ばしている。
あれで本気じゃないんだよなぁ……しかも神術まで駆使されたらもう最強じゃないか（苦笑）
とか感心しながら戦闘を観察していると、討ち漏らしが俺の方へ向かって走ってくるのが見えた。
「そろそろ出番ですか……昨日の夜よりもさすがに数が多いし、油断もしてない敵だ……こっちもこっちでしっかり気合い入れないとな」
「ふぅぅぅぅ……」
心を平静に……五感を鋭敏に……俺の意識がこの場を支配するように……
気合いを充実させていく。
身体の隅々まで力を行き届かせながら、自然体のまま、敵の攻撃がこちらに届く半歩手前まで、その場を動かない。
「グギャーグギャギャギャー」
まず正面から棍棒を振り下ろしての一撃が迫る。
それに対し、右足を引き半身になることでかわす。
敵が前のめりになる勢いを殺さず、相手の右手首を取り、足を掛けながら手首を返し、その場で一回転させ、背中から落とす。
仰向けになった敵の首を思いっきり踏み、首を折る。

右、左、正面の3方向からそれぞれ剣を持ったゴブリンが突きを仕掛けてくる。
前方宙返りをしながら避け、そのまま正面の奴の登頂部へ踵を落とす。
着地後素早く左手にいる奴に右足による上段蹴りを放ち、頸椎を破壊。
最後に残った奴を倒そうとした時、ナイフを持った新手が俺の背後を襲う。
身体を半歩左にずらしながら、背後にせまった刺突をかわし、相手のナイフを持つ右手首を左手で取る。
そのまま一本背負いをし、相手の背中を地面に叩きつけると同時に喉元に拳を叩きつけて潰す。

横凪ぎの剣が目の前に迫り、上半身を反らすことで避ける。
そのまま後転飛びをし、立ち上がる。袈裟斬りの剣、槍による突き、棍棒による打撃と次々と攻撃が迫ってくる中、避けて打ち込む、いなして投げる、投げながら打つといった具合に対処していく。

集中を切らさず、周りの動きを支配し、自分がもっとも効率よく動く。

これだけ感情的で直線的な攻撃なら、例え多対一でもそこまで手こずることはない。

それにやはりといった感じだが、俺の身体能力がちょっとだけ底上げされている。

そんなぶったまげるほど上がってるわけじゃないのだが、普段ならいくら敵の態勢を崩していたり、相手の攻撃する力を利用しているとはいえ、止めをほぼ一撃で決められるってことはない。

本来ならもう2、3発入れるか、首を絞めたり折ったり、頭を地面に叩きつけたりしないと絶命まではさせられない。

だが、今も、敵の刺突をかわし、相手がこちらに来る勢いを殺さずに腹に貫き手を一発打ち込んだだけで、内臓を潰した感触がした。

まぁー結果的にはありがたいので、いいんだが……

これに頼ったらこの先強くなれないよなぁ……やっぱ心身ともに鍛練が必要だな……

俺はそう固く決意し、次の敵を倒しにかかる。

13（前書き）

未熟すぎる作品ですが、よろしくお願いします。

13

突いてきた槍の穂先を避け、引き戻せないように柄の上部を左の脇と、手で取る。
すかさず身体を右に移しながら小内刈りを掛ける。
相手が背中から地面に倒れたと同時に拳を首に叩き込む。
「グゲッ」という悲鳴を最後にそいつは絶命した。
「さて、こっちは大体片付いたけど……」
と額の汗を拭いながら、2人の方を見る
当たり前だが、無事に向こうも終わったようで、すでに短剣を腰の後ろにある鞘に納めたリンさんと、右手で持っている槍の上部を肩に寄りかけさせている、ルーカスさんがこちらに歩いてくる。
うーん、歴戦の戦士2人って感じだなぁ……
「ふ、ふーんだ！術さえ使えてれば私の方が討伐数多かったんだからね！白兵戦だけなら私のが2体多いんだし」
「どう言い訳してもいいが、最終的な討伐数は俺が38でリンが27なのには変わりないぞ？」
勝ち誇った顔をしているルーカスさんと、「ぬぅ〜」と悔しそうなリンさんのそんな会話が聞こえなければ、ホント完璧だったのになぁ……（苦笑）

そんな微笑ましい（？）光景を戦闘が終わった脱力感と穏やかな気分に浸りながら見ていると、フと言い知れない違和感に襲われる。

どこからか見られているような……粘っこい視線のようなものを感じる。

不安におそわれ、抜いていた気と力を戻す。

周りを警戒し、すぐに動けるようにしておく。

俺が今だ戦闘態勢を解かず、キョロキョロしているのを不思議に思ったのか、リンさんが歩きながら話しかけてくる。

「おーい！どしたんだよー？」

「油断大敵」

この言葉をこれほど痛感するのは、後にも先にもこの時だけだろう。

少しは考えるべきだったのだ、そもそもなんでこんなところで大量のゴブリンが現れたのか。

あいつらは村を襲うために現れた？

あいつらの目的は俺たちだった？

両方とも何の確証もないのに、なんとなくどちらかだろうと決めつけていた。

なんで考えなかったんだろうか？

そう、あいつらはこいつから逃げて来たんだ。

そいつは待っていたんだ、ゴブリンに気を取られ、他への警戒が薄れるのを……

息を潜め……気配を隠し……確実に狩りを成功させるために……

ブワッ！！！

っと殺気が膨れ上がる。

気が付いたら、そいつはリンさんとルーカスさんの背後に立っていた。

右目と左腕がなく、身体中傷だらけでありながら、筋骨隆々で３ｍほどあるその体躯が持つ迫力は、まさに怪物といった感じだ。

右手に持つ巨大な斧は、柄も刃もボロボロでありながら、振り降ろされれば、ミンチになるのは確定だ。

そして、そんなシロモノが今まさにルーカスさんとリンさんに向けられているのである。

「助けなきゃ……」

そう思った。それしか思わなかった

だから走った。

周りの風景がスローモーションになる。

怪物と２人がいるところまで大体１５ｍくらいだが、遠く感じてし

まう。

奴は、体を左に引き絞り、そのまま横一線に斧を薙ぎ払う。
右手一本の一撃なのにも関わらず、その威力は2人をまとめて真っ二つにできそうなものだった。

その一撃が放たれた頃に、2人はやっと振り向き、自分達の置かれている状況を把握していた。
だが、もはや全てが遅い。
今から動いたとして、避けることも、迎撃することも不可能だ。
2人もそう悟ったのか、自分の死を覚悟したかのように身体の力を抜いた。

「そうはさせねぇよ……」
俺は2人の肩を両手でそれぞれ掴む。

2人の間に滑り込みながら2人を後方へ吹き飛ばすつもりで思いっきり後ろへ引く。

「え……？」

という声が聞こえたような気がした。

強烈な右からの衝撃に吹き飛ばされながら
「今回は最初から諦めずに動くことができたなぁ……」
と頭の片隅で考えていた。

14

「えっ……」
身体が後ろへ浮くのを感じながら、私は目の前で起こっていることが信じられなかった。

グシャッッッッ！！！
という音が聞こえ、彼は左方へ吹き飛ばされる。

ザシャァァァ……ゴロゴロゴロ……
元々みすぼらしい格好だった彼が、さらにボロ雑巾のようになる。

尻餅を着く格好で地面に着地した私は、その後ピクりとも動かない彼を見て、やっと思考が動き始めた。

「な、なんで？」

わからなかった。なぜ彼がこんなことをしたのか。

なんせ彼とはついさっき会ったばかりだ。

血の匂いをさせ、やたら軽装な出で立ちで現れた彼。

記憶喪失だと言い、常識中の常識を聞いてくる彼。

見たこともない戦い方をし、素手でゴブリンの集団を圧倒する彼。

非常に胡散臭い存在だ。誰がどう見ても怪しい。

だから心を許すようなことはなかった。
常に警戒を促していたし、釘も何度か打っておいた。
もし、彼がいることで私達が不利になるようなことがあれば、簡単に見捨てることになっただろう。

なのに……なのにだ！！
どうして……彼があそこで転がっているのよ！！

村までの同行を許したのは、単なる気まぐれだし。
質問に答えたのだってただの暇潰し。
ゴブリンとの戦いで逃げるように言ったのだって、依頼を終えたばっかりで、私達が消耗してるから足手まといはごめんだったってだけ。

あなたに命を助けてもらう義理なんてない！！

それも、戦いの中で油断し、命まで諦めた私が助かって、あなたが死ぬなんて間違ってるじゃない！！

自分を責める思考の闇に捕らわれる……

「立てっ！リン！！」

ハッと顔をあげ、すぐに左を見ると、すでに立ち上がり戦闘態勢に入っているルーが居た。

「まだ何も終わってないぞ！！それに、あいつはまだ生きている」

「……えっ？」
一瞬、ルーが何を言っているかわからなかったが、すぐに悟り、急いで彼に対して五感を集中させる。
「ぐ……がはっ……はぁはぁ……」
わずかだが息づかいが聞こえる……
だけど心音が弱まってきていて、早く治療術をかけなければ危ない！
ヒュッッッ！！
風切り音が耳を襲う
隙だらけになっていた私に大斧が振り落とされたのだ。
ガキィン！！
思わず瞑ってしまった目を開けると、ルーがそれを受け止めてくれていた。
「ぐっ……そろそろ目を覚ませ！！助けられるものも助けられないぞ！！」
ここまで来てやっと、自分がどれだけふぬけていたかに気づく。
「そうね……絶対助けてみせる……」
立ち上がり、二本の愛刀を鞘から抜き、構える。
絶対に死なせない！！

「ルー、ごめん！！ありがと！！それじゃいくわよっ！！」

「ルー、ごめん！！ありがと！！それじゃいくわよっ！！」

「応ッッ！！！」

俺は鍔競り合いを崩すべく、全力で相手の斧を押し弾く

ガギィン！！

瞬発的な力に押され、敵が後ろにたたらを踏む。

そこへ間髪入れずに敵の懐へリンが飛び込む。

左の膝へ斬撃を叩き込もうとするが、敵もこの攻撃を読んでいたようで、さらに後ろへ飛んでそれを避けた。

攻撃が失敗すると、リンもすかさず俺の横へバックステップで戻ってくる

「さすがに何度も見せてるだけに、避けられるわね」

「ああ」

そう、奴と対峙したのはこれが初めてではない。

なんせ、今回の依頼で討伐対象となっていた魔獣の一体なのだから。

個体名「ブラック・オーガ」

こいつが頭目になり、オーガ１２体を率いて近隣の村や街、行商中の商人が多大な被害を受けていたのだ。

俺達はギルドで奴らの討伐依頼を受け、寝床にしているというスプリガンの森へ向かった。

戦いはかなりの激戦となった。

元々、Ｂクラス相当のオーガが１２体、Ａクラス相当のブラック・オーガが1体というＡクラスクエストの中でも高難度の依頼だ。

そのため、ある程度の手強さは予想できていたのだが、その予想を遥かに上回るモノだった。

統率のとれたオーガの集団、それを巧みに操るブラック・オーガ。

俺とリンが１２体のオーガを倒した頃には、すでにかなりの消耗を負っていた。

ブラック・オーガとの決戦には、俺もリンもそれこそ決死の覚悟の下で戦った。

奴の右目と左腕を奪い、致命傷に近い傷も幾つか負わせた。

後はトドメのみとなったとき、追い詰められた奴は何を考えたのか、みずから谷底に落ちたのだ。

なぜそんな行動に出たのかは、全くわからなかったが、俺とリンはすでにあれほどの手傷を負った奴がまさか谷底に落ちて生き残れるはずがないと思い、帰還してしまったのだ。

そして、その結末がこれだ……

槍を持つ手に力が入る。

標的の死を確認せず見逃す。
勝利したことに満身し、戦場で油断する。
どちらも俺の失態だ。

なのにそれを犯した俺が五体満足で、あいつは俺の命を救い、みずからが瀕死の状態になっている。

本来なら、逆でなければならないはずだ！！

これで例えブラック・オーガを倒せたとしても、あいつが死ねば、俺は自分を絶対に許せないだろう。

必ず……必ずあいつは死なせない！！

１５（前書き）

未熟すぎる作品ですが、よろしくお願いします。

15

「お前さんがここで泣こうが喚こうが、あるいは死んだとしても、この世界は変わらずに流れていく。
お前さんなんぞ、その程度の存在でしかないんじゃよ。
じゃが、お前さんにも変えられる世界が唯一ある。
その両の手の届く範囲にある世界じゃ。
そこに有るものを大切にしたいと願うのなら、守る力をわしが授けてやろう。
さぁ？どうする？お前さんはその世界をどうしたい？」

「がはっ……はぁはぁ……」

じじぃの夢で起きるとは、胸くそ悪ぃ……そりゃ血も吐くわな……

うぅ……あちこち痛いが、右の脇腹が一番やばいな……感覚がない……

大斧の刃の部分を受けたらやばいと思って、柄が当たるだろう範囲まで踏み込んだはずなのにこのダメージ……

まぁー死ななかっただけマシか？これも身体能力向上のおかげだな……

腹這いの状態から顔をあげて、周りの様子を探る。

すると獣人2人とその倍くらいのデカさがある隻眼、隻腕の黒い怪物が戦っていた。

うわぁ……さすがに苦戦してんなぁ……やっぱ神術使えないとあのクラスはきついか……

3mくらいある身長、筋肉と黒い硬そうな皮膚で覆われた人型の怪物は、獣人2人の攻撃を常に読んでいるかのように動きまわり、2人の連携攻撃の隙を突くように大斧を振っていた。

あの巨体であの動きは反則だろ……しかも一撃くらったらこっちは終わり……クソッタレすぎるな（苦笑）

さて……俺にできることはあるか？

このままじゃあの2人の体力が尽きた時点で負けが確定だ……冗談じゃない、あの2人に生き残ってほしいからこっちはこんだけ体張ったんだ。

助けた後に結局殺されましたなんて嫌すぎる。

とりあえず、どれだけ動けるかだな……

と思い、身体の状態を確認してみる。

肋骨が何本か折れてるな……肺も傷ついてるみたいだ……全身打撲……靭帯断裂……左足首もなんか変だな……あとは……わからん（苦笑）

と、そこまで確認し終えて気づく。

この身体、丈夫になってるだけじゃなく、再生力も上がっている。
徐々にだが、痛みが引いてきている部位があるのだ。
人間離れしてきているなぁと思うが、それでも今すぐ万全な状態まで回復できるかといえば、無理だろう。
だからまぁ……一撃だ。
隙を見つけて、一撃ブチ込む。
ベタすぎるが、これしかない。
ギリギリまで身体を回復させて、隙ができた時に突っ込む……これしかないな……

「ハァ……ハァ……ハァ……」
身体の熱が上がってくる……痛みの消えてくれた部位もあるが、逆に右脇腹が思い出したかのように痛みを発し始め、意識が朦朧としてくる。
だが、今この状況で気を失っているわけにはいかない。
目の前で繰り広げられている戦況が、刻一刻と悪くなっているからだ。
時間が経つにつれて拮抗していたパワーバランスが崩れだし、2人が怪物に圧され始めている。

なんとか怪物の攻撃を防ぎ、反撃を試みているようだが、これといった決定打になっていない。
逆に、奴の攻撃は確実にリンさんとルーカスさんの連携を崩し、ダメージを蓄積させている。

このままじゃじり貧だ。どうする……なんかないのか……

逆転の一手を求め、戦闘を細かく観察していると、この状況に陥っても、2人の動きに全く諦めを感じられないのに気づく。

何か奥の手があり、それを使う機会が来るのを待っている。
そういう動きをしている。

なら、その機会を作るのが俺の役目だろう……。
一発、キツいのをブチ込んでやる……。

あいつを倒して、無事に3人で村まで行くんだ。

そう心に強く刻み込む……

となれば、急がないとな……今の状態でも、我慢すれば一撃ぐらいはなんとかなるだろ……

俺があの怪物に決定的な隙を作れば、あとはあの2人がなんとかしてくれるはずだ。

「スゥゥゥ……フゥゥゥゥゥゥ……」

身体の痛みを忘れ、集中する。

立ち上がり、再び戦場へ赴くために歩き出す。

左足がびっこ引く形になるが、一歩、また一歩と歩きながら、自分の身体の隅々に力を巡らせる。

ソコまで大体、２０ｍくらいか……我ながら吹っ飛ばされすぎだろと思う……もっと筋肉つけて頑強にしたいが、うちの流派ってそういうんじゃないんだよなぁ……じじぃもめっさ細いし……

などとくだらないことを考えていると、敵まであと６、７ｍくらいのとこまで来ていた。

リンさんとルーカスさんが何やら言っているが、うまく聞こえない。だからニヤケヅラで手を振ってみる。

目の前にはデカ黒い怪物がいる。

俺なんぞ、もはやなんの障害にもならないと思っているらしく、こちらに見向きもしない。

「ハァ……ハァ……ハァ……」

舐めんなよ……一発もらって、そのまま泣き寝入りするほど、俺は優しくないぞ……

俺は周りが見えなくなるほど、奴に意識を絞り、腰だめに力を溜める。

よし……いくぞ……

と思ったその瞬間、奴がこちらに向き直り、そしてニタリと笑った……ような気がした。

「グォオオオオオ！！」
という雄叫びと共に、大斧を振り上げて飛び掛かってくる。
いつの間にかリンさんとルーカスさんが俺の前に並んで立ち、壁になってくれていた。
が、俺はその間をすり抜け、走りだし、奴と一騎討ちの形になる。
後ろから何やら声がするが、振り切る。
柔術家に、力任せの大振りをしてくるとは……後悔させてやるよ……
俺は振り下ろされた一撃に対し、身体を瞬時に半歩ズラすことで避ける。
そのまま奴に向かって飛び掛かり、振り下ろされて、伸びきっている二の腕を両手と左脇でロックする。
「ハァァッッ！！」
ソコを支点にして、空中で無防備な体勢になっている奴の上半身に向けて、思いっきり右足を叩きこんだ。
変則の巴投げのような形になり、「グワンッ」という音と共に奴はそのまま半回転して背中から地面へ叩きつけられる。
俺も蹴りの反動でそのまま背中から地面に落ちた。
「ぐえっ」
カエルのような声を発した後、すぐに顔を上に向ける。

そこには雷を纏った槍が奴の心臓に、逆巻く風を纏った短剣が喉元に突き立つのが見えた。

「フゥゥゥ……終わったぁ……」

しみじみ言いながら、俺は眠りにつく。

１６（前書き）

未熟すぎる作品ですが、よろしくお願いいたします。

16

保健室の匂いがする……

そう思って目を開けると、すでに夜なのか、周りは薄暗い。

どこからか漏れてくる光と目が暗さに慣れてくることで、ようやく周囲をなんとなく把握できるようになる。

正面に知らない天井があった。

……ここはあれだな……まぁ言っとくべきだよな？

だって……そうそう言うようなセリフじゃないし、日本だともはや恥ずかしくて言えない級のヤツだしな。せーの……

「知らない天井だ……」

シンジ君……今、この瞬間だけだが、僕は君と同じになれたよ……

セカイ系デビューを果たし、なんだか感慨深いものを感じていると…

「えっ？」

と言う声が聞こえ、どこからかトタトタという足音が聞こえてくる。

上半身だけ起こそうとすると、ズキッと右の脇腹が痛む。

「うぅ……」

と思わずうめき声をあげてしまうが、かまわず身体を持ち上げる。
すると、自分が清潔な白いベッドに寝かされていて、左側と頭側が壁に密着していて、それ以外がカーテンで仕切られていることに気づく。
まるで病院だな……そういや着ている服も病人用の寝間着みたいだ……ところどころに包帯も巻かれてるし。
あれ？てか俺ってなんでこんなとこにいるんだっけ？
と今さらながら考え始めると、フワッと部屋が明るくなる。
そしてトタトタという誰かがこちらに歩いてくる音がする。
多少身体を緊張させてそちらに顔を向ける。
シャッいう音と共に仕切りカーテンの右側が開かれる。
「起きられたんですね！」
目の前には金髪碧眼の美人看護婦さんがいらっしゃった。
え？……いや……なんだこの状況……
いきなりのことで混乱気味な俺はとりあえずマジマジと相手を見つめてしまう。
そして、とりあえず……とりあえず挨拶してみる。
「お、おはようございます？」
挨拶さえちゃんとしとけば、対人関係ってとりあえずなんとかなる

し……いや意味わからんな……大体、そんな「とりあえず」ばっかの奴、嫌だし……

「はい！おはようございます！」

と煌めく笑顔で挨拶を返してくれる看護婦さん……かわいっっ！

「フフッ、今からきちんとご説明いたしますので、ご安心ください」

看護婦さんの笑顔で固まっていた思考が再度まわりはじめる。

「今、お水取ってきますので、ちょっとお待ちくださいね」

と相変わらずの笑顔のまま、トタトタと隣の部屋へ行く看護婦さん。

うーん、イイねッッ！！

白衣の天使ってもはや伝説の生き物かと思っていたけど、さすが異世界！！

俺、がんばってこの世界で生きてこう……うん！

そう決意を新たにした俺は、ひとまず自分が覚えているところまで思い出すことにした。

えーっと、ゴブリン軍団倒して、あの怪物と戦って、多分倒したんだよ……な？

それで……あぁ……そっから記憶ないな……

と記憶を整理していると、看護婦さんがお盆に水差しとグラスを載

せてこちらに来る。

枕元の横にある小さなテーブルにお盆を置き、

「お待たせしました。こちらどうぞ」

と水差しからグラスに水を注ぎ手渡してくる。

「ありがとうございます」

受け取り、一口飲む。冷たくてうまい。

看護婦さんがゴトっとテーブルの下にあった丸椅子を、俺の膝あたりの位置に置き、座る。

そして、笑顔のまま俺の目を見て

「まずは、遅くなりましたが、自己紹介させてただきます。私はこの治療院で看護婦を務めております、エリカと申します。よろしくお願いしますね。」

顔を少し右に傾けて言ってくる……反則技だろ……ソレ。

「こ、これはご丁寧にどうも。自分はユウと申します。こちらこそよろしくお願いします。」

背筋を伸ばし、手を（布団が掛かってる）膝の上に置いて軽くお辞儀する。脇腹がちょい痛い……

「あらら、随分お行儀の良い方ですね。」

そ、そうかな？……普通じゃね？

と思っていると、仕切り直しのつもりか、「オホン」と軽くセキをする看護婦さん。

「では、ユウさんの現状について、私の知ってる範囲ですが、ご説明させていただきます」

「あ、はい。よろしくです。」

「まず、あなたがブラック・オーガを倒してから、すでに2日経っています」

「え～っと……ブラック・オーガってのはあの黒くてデカい人型の怪物のことですか？」

「はい、その認識で間違いないはずです」

やっぱ倒せたのか……よかった……にしても……

「2日も寝てたのかぁ……俺」

まぁー世界間を移動してきてから、ちゃんと寝てなかったしなぁ……

「戦闘が終わった後、気を失ってしまったユウさんを、ルー君が担いで、ここまで運んできたんですよ。」

「うわぁ……悪いことしたなぁ……」

あとで文句言われそうだ……うぅ……気まずいなぁ……

「かなりの重態だったのですが、ユウさん自身の治癒力が元々高かったのもあって、私と姉の治療で全治一週間というところまで持ち

直しました。
けれど、その後意識が全然戻らなかったので、心配していたんですよ……」
うわぁ……ご迷惑おかけしてるなぁ……肩身狭いわぁ……
「あ、ありがとうございました。それに、ご心配もおかけしたみたいで、なんかすいませんでした……」
「いえいえ、怪我や病気をした人に治療をすることが私たちのお仕事ですから。
それに、ルー君もそうですが、リンちゃんのあんな表情見せられちゃったら治さないわけにはいきません」
と何やら含み笑いをしながらおっしゃるエリカさん
それはどういう……
なんかリアクション取りずらいなぁ……
「そ、そうですか……さすが看護婦さんですね」
後頭部を掻きながらニヤケヅラで意味不明なことを口走る俺……キモ……
「ってことはあと4日くらい寝たきりでいないといけないんでしょうか？」
とにかく次の話題に行きたかったので、急いで質問をする。
「うーん、寝たきりでなくてもいいですよ？でもあんまり激しい運

動はダメですねぇ……安静にしてくださいね」
と右手の人差し指を顔の横で立てながら、可愛く言われる。

「りょ、了解っす」

身体が鈍りそうで嫌だなぁ……隠れてトレーニングしちゃうかな……

「あ、そうそう、ユウさんの私物のお洋服2着はそこのハンガーにかかってますので、安心してくださいね。」

そう言われて向かいの壁を覗いてみると、柔道着と制服が綺麗に壁に掛かっていた。

「あれ？……破れてたりしたと思うんですが……」

「リンちゃんが直してましたよ？生地がちょっと特殊な素材だから苦戦してたみたいですけど（苦笑）」

「リンさんが……うーん……いくらお礼しても、し足りないなぁ（苦笑）」

「ふふっ……そんなことないと思いますよ？
だって……ってこの先は当事者同士でお話するべきですね。朝には来ると思いますよ？」

な、なんだよそれ……なんかこえぇよ……

「私がお話できることはこのくらいですね。
夜も遅いですし、そろそろお開きにしましょうか。
ユウさんもお休みになったほうがいいですよ？」

そう言いながら立ち上がり、俺の上半身を優しく寝かせるエリカさん。

い、イイにほいが……

薄めの布団を肩までかけ直してくれ

「この時期は暖かいですけど、油断して風邪でも引いたら大変ですからね」

笑顔でそう言うエリカさん……天使すぎ……

「あ、ありがとうございます」

テーブルに丸椅子を戻し、カーテンを閉めながら

「ふふっ、ではおやすみなさい」

うーん……この世界で初めて癒されたなぁ……

17（前書き）

未熟すぎる作品ですが、よろしくお願いします。

17

「おやすみなさい」

……って言われてもなぁ……正直寝れんよエリカさん……（涙）

もう十分寝たし、目ぇ覚めちゃってるんだよなぁ……

あぁ～……こうなるとめっちゃ暇だ……現代っ子舐めんなよって感じです。

眠れない時に暇を潰せる物がないってのは地味にかなりつらい……

暗闇の中、身悶える。

さらに、2日も寝っぱなしだったということもあり、身体を動かしたい衝動に駆られてくる……

やばいなこれ……禁断症状とか出そうだ……

元々、武術をやっている人間は結構ケガや痛みってのには慣れている。

ケガしたまま軽めの鍛練をすることだってある……

うん……まぁ～だって、仕方ないよこれは……これは仕方ない！

自分の中で何度も頷き合う。

そうと決まると、抜き足差し足で制服の掛かっている壁まで向かい、そこで着替える（靴も制服の下に並べてあった）。

フと気づく……俺の身体が清潔になっている……？
そういや寝ている間の排泄とかって……？

いやいやいやいや……ここにも男の職員くらいいるだろぉ……いるはずだ！！

そう考えよう考えようとしているのに、浮かんでくるのは……

金髪のボブで、目鼻立ちはタレ目でおっとりした感じ。
スレンダーな体型に看護婦さんの制服がかなり似合っていた。

そういや、耳が尖ってて長かったような……っということはエルフかぁ……イメージより小柄でおっとりだったけど……あれはあれで良いなぁ……

じゃなくてっっっ！！

……いや、もうこれ以上は深く考えるのやめよう……恐ろし過ぎる……

それより脱出が優先だ……今はいち早く身体を動かしたい気分だ……。

ガムシャラに身体を動かしたくなるのを一旦抑え、キョロキョロ部屋の中を観察する。

ベッドが3つあるのだが、ベッドの頭側にある壁、つまり俺の向かい側にある壁に窓が2つある。（ベッドとベッドの間に窓がある感じ）

さっそく右の窓を開けてみると幸い、1階のようで、楽々と外に出れた。

っということで、治療院からの脱出に成功……

何やってんだ俺……とか考えたら負けだ。笑っとけ笑っとけ（笑）

窓を下りてすぐの地面は草むらで、治療院は壁に囲まれているらしく、正面と右には行けない。

仕方なく左へ行くと、治療院の正面入り口がある場所に出れた。

そこでちょっと驚く。

ボンヤリとだが、明るいのだ。

目の前に整備された大きめの道が、横に通っているのが見えるし、その道の向こう側に別の民家が見える。

こりゃ助かるけど……光源はなんなんだろう

と考えつつ道に出てみる。石畳とかコンクリートではなく、土の地面だが、ちゃんと整備されている。

どっちに行こうかなぁ……と迷っていると、どちらの道の先にも柱の上に何やらボンヤリ光る球が載っているのが見える。

あれが光源だな……あっちは門みたいなのが一緒に見えるから村の出入口か？

あっちは……広場みたいになってるな……

時間はまだまだあるんだし、どうせだから鍛練だけじゃなく、ちょっぴり散策もしてみようかな。

となると村の中心地へ行った方が、この時間にやってる店とかもあるかもだし、面白いかもしれない。

よし、なら広場みたいになってる方へ行ってみますか。

俺は治療院を背にして左の方角に歩き出す。

歩いてみると、やっぱボンヤリでも明るいのは助かるなぁと感じる。
森で遭難したから余計にだ。
それに整備された地面の歩きやすさにもびっくりだ。歩くのに何も障害がなく、道が平坦なことがこんなにも素敵なことだったとは……

俺が日本で当たり前のように享受していた恩恵のデカさを今さらながら実感する。

はぁ……なーんかもはや日本の便利さが懐かしいと感じるようになってきたなぁ……
この世界へ順応でき始めてることはうれしいことのような……悲しいことのような（苦笑）

まぁー今は無事に村にたどり着けたことを素直に嬉こんでおこう。

こうやって人の気配を感じる空間ってのはやっぱ安心する。

道を歩いている人はいないが、自分の持つセンサーのようなものが、

道の左右にある家々に居る人たちの気配を感知してくる。

……いやね、わかってますよ？家の中に人がいる気配を感じれて嬉しいとか、変態感が出ちゃってることぐらい……でもそこは大目に見ようよ……寂しかったんだって……森（涙）

歩きながら、右手の掌を眺める。

元々、気配察知の能力は俺の扱う柔術では必須のもので、鍛えてはいた。

だが、今ほどのモノではなく、完全にこの世界に来てからより鋭敏になっている。

結局これも身体能力向上のおかげなんだろう。もしかしたら別の力かもだが……

いずれにしても、この世界に来てから「与えられた力」だ。

俺自身が修練の末、手に入れたものじゃない。

それなのに、最初からソコに居たかのように、俺の身体の一部となっている。

そのことに、結構ムカついてたりするんだ。

結果的にこの力のおかげで命が助かってるわけだから、文句を言う筋合いなんぞないのかもしれない。

だけどやっぱり、いきなり顕れた得体の知らない力に頼らなければ、

敵を倒すことも、生き残ることもできなかった……
そんな自分の弱さが許せない。

この力がもしなかったら……
そう思うと沸き上がる、この恐怖心が許せない。

だから……もっと鍛え上げなきゃならない……
この力に驕らず、媚びず、俺自身を鍛え続けることを絶対にやめちゃならない……
あの日誓った約束を違わぬために……
俺の求める強さを必ず手に入れる……

右手の掌を強く握りしめ、そう心に強く思い直す。

そんなことをグダグダ考えている内に、広場に歩き着く。

広場の中心には石造りの丸い台があり、その上に5mくらいの白い柱がある。
そしてその柱の天辺にある球が淡い光を発していた。
　あれも神術によるものなのか？
なんか淡くて綺麗な色だな……

　っていやいや、女子かよ！魅とれてんじゃねぇっつうの（苦笑）

　なんか夜に光ってる照明見てたら日本思い出しちゃったよ……

くっそ……まだ完結してない漫画やらラノベやらいっぱいあったのに……海賊王にあいつはなれるのかとか……黒い狂戦士は復讐を果

たせるのかとか……「不幸だ」が口癖の高校生は……ミスマルカは……

うがぁあああああああ……腹立つわぁ……絶対帰ってみせる……

さて、なんかないかなぁ……と広場を探してみる。
広場を中心に建物がこの辺りに集中しているようで、昼間はなんかのお店なんだろうと想像できる建物もいくつかあった。
この時間でもやってるお店ないかな……と歩いていると、俺が来た道とは反対側に同じような道があり、その近くに、中から光が漏れている開いてそうな店が一軒だけあった。

「お、入れるかな？」
と思ったが、そこで立ち止まり
「ってか俺、金持ってないじゃんそういえば……」
と致命的なことに気づく。

飲食店じゃなきゃ、見るだけも通用するかもだが……どうすっかなぁ……

腕を組んでとりあえず悩んでみる。

18（前書き）

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

※インフルエンザにかかってしまい、更新速度が遅くなっています。すみません。

18

「うーん……考えてみりゃ当然だよなぁ……まぁー今さらなんだけどさ」

腕組みしながら苦笑する。

店（？）に入るかどうか、入り口の正面に立って悩んでたんだけど、フとそういやなんの店なんだ？と思って、入り口の上に大きく掲げられている看板をよぉく見てみた。

「冒険者ギルド、アルク村支部……って、あーこれがギルドか」

と納得しつつも、見過ごせないある事実が残る。

あんな文字は知らないのに……読めちゃってる（苦笑）

そういや、リンさんやルーカスさんともいきなりスムーズに喋れたけど、この世界の口語が日本語なわけないよなぁ……

でも俺には日本語に聞こえてたし、日本語を喋ってるつもりで話しかけていた。

んで、会話は成立してた。

ってことはつまり、言葉や文字を翻訳している力が俺に働いているってことだよな

神術の可能性もあるけど、誰がなんのためにだよって感じだし

はぁ……次から次と、なんでこう色々出てくるかなぁ……なんかイライラしてきたわぁ……もしこの世界に俺を召喚しました私みたいな奴が現れたら、必ずぶっ飛ばす……理由がなんであろうと必ず一発は殴る……

そう決めて、これについては一旦保留する。
悩んでも仕方ないし、最近こんなんばっかでさすがにめんどくなってきた。

なんか新事実が出てくるまで、放置じゃボケが。

思考を目の前にあるギルド支部へ切り替える。

ふー……んじゃまぁとりあえず入ってみますか。別に金もいらないだろうし。

中に入るため、入り口へと足を進める。

木造一階建てで、大きさもそれほどでない（近所のコンビニくらいかなぁ……）地味な外観だが……。
はてさて、中はどんな感じなのかな。

と軽く期待感を持ちつつ、ドアノブを回して引き、中に入ってみる。
カランカラーンというお馴染みの音を聞きつつ室内を見回す。

カウンターを隔ててあっち側とこっち側に別れているようだ。

こっち側にはちょっと背の高い丸テーブルが２つあり、壁には何やら紙が何枚も貼ってある。

うーん……パターン的にはこの貼られてるのが依頼書っぽいよなぁ……

向こう側はこちらとは違い、事務作業をするためのデスクが3台置かれてたり、書類などを保管するための棚などがある。

あっちで色々手続きとかしてくれるわけか……

にしても、なんで誰もいないんだ？明かりも点いてるし、鍵も開いてたからやってないってことはないだろうし……

キョロキョロしてると、「ガチャ」という音と共に向こう側の奥にあったドアが開いた。

「おや？こんな時間にお客様ですか……ふむ？見ない顔ですね。ご用件は？」

「カツッカツッ」とドアから出てきてカウンターまで男が歩いてくる。

身長は俺より少しデカいくらいだろうか、スラッとした体型に白いシャツと紺のネクタイ、下が黒のスラックスと革靴という出で立ちをした金髪碧眼イケメンエルフだった……。

肩まである金髪とメガネ、軽く微笑んだ口元がやり手さを伺わせる……

なんだよこれ……エルフって美男美女しかいないのか？？なんかむかつくわぁ……

と思いつつも、先ほどされた質問に答える。

「いやーちょっとこの辺りを散策してたんですが、ここだけこの時間でも開いてるようだったんで、試しに入ってみただけなんですよ。すみません」

俺は苦笑して、右手で後頭部を掻きながら言う

……よく考えてみたら、結構な不審者だな……俺

にも関わらず、イケメンさんは「ふむ」となにやら納得すると

「なるほど、見学希望者ですか……でしたらどうぞゆっくりしていってください。

何か聞きたいことでもあれば、ご質問していただいても結構ですよ」

な、なんてこった……こんな不審者に紳士的対応をしてくるとは……モテるだろうなぁ……死ねばいいのに……

っていやいや、初対面の紳士イケメンになんてことを……まいったな……普段モテないせいで、嫉妬の炎が狂おしいほどに燃え上がってる……

俺はなんとか心を落ち着かせながら、カウンター越しにイケメンさんと相対する位置まで移動する。

「あ、ありがとうございます。なら、ギルドへの登録についてお聞きしたいんですがよろしいですか？」

イケメンさんは「かまいませんよ」と言うと、カウンターの下に手を入れ、一枚の紙とカードを取り出す。

「登録していただくにはこちらの用紙へ必要事項をご記入いただき、こちらに心力（しんりょく）を込めていただく必要があります」

用紙に手を添えた後、カードの端を摘まんで、俺の目の前にかざすイケメンさん。

カードは全体が銀色でＰＡＳＭＯくらいの大きさだ。

真ん中に、おはじきのような形の紫色をした石が嵌め込まれており、４つある角にも小さな球型の石がそれぞれ嵌め込まれている。

へぇーなんかカッコいいなこれ。ちょい欲しい……

って違うだろ！！

現実から目を逸らしてる場合じゃねぇんだよ！！

さっきイケメンさんが言ってた「しんりょくを込める」ってワード……

まず「しんりょく」がなんのことかわからない時点で終わりな気もするが、これについては聞けばいいことだ……

ただ、それをこのカードに込めるときたもんだ……

俺にそれができるのか？

もしできなかったらギルドに登録できない？

そうなると路上生活者まっしぐらじゃねぇか！！

俺が自分に待ち受けるであろう最悪の未来を妄想し唸っていると

カードをカウンターに置いたイケメンさんがさすがに見かねたのか

俺に声をかけてくる。

「な、何かご不明な点でもございましたか？」

しまった……イケメンさんが若干引いてる……えーっと……どうする？えぇーい、ままよ！！

「い、いやいや、特にそういうのはないですよ。
ただ、僕、３日前くらいから記憶喪失になっちゃってましてー。大体のことは偶然出会った冒険者さんに教えてもらってたんですけど、しんりょくってものについては聞いてなかったんですよー。もーこまっちゃいますよねーあっはっはっはー」

はい、自爆ー（涙）テンパってやらかしちゃいましたー！これで不審者大決定でっす！！

俺が自分の可哀想さ加減にウンザリし、俯いていると

「ふむ、なるほど」

とイケメンさんが何やら納得したご様子

「え？」

と俺が顔を上げると

「あなたはもしかして、リン殿とルーカス殿をご存知ではありませんか？」

イケメンさんは右手を自分の顎に添え、その肘を左手で支えるよう

にしたポーズを取りながら俺に質問してきた……キマってるなぁ……

「え……？あ、はい。その2人に遭難してるところを助けてもらったんです」

それを聞くとイケメンさんは笑顔で頷き

「ふむ、やはりそうでしたか。であれば、私はあなたにお礼を申し上げねばなりませんね」

「はい？」

なんでこんな不審者に？？

１９（前書き）

未熟すぎる作品ですが、よろしくお願いします。

19

「ルーカス殿から大体の経緯は聞いております。
あなたがいなければ、ブラック・オーガは倒せなかった。
もし、奴を倒せなければ、この村が襲われ、甚大な被害を受けていた可能性もあります。
そして何より、古い友人であるあの2人を助けていただいたことに深く、感謝を申し上げます。」

深々とお辞儀をするイケメンさん。

それに焦る俺

「いやいやいや、俺とか全然そんな大したことしてませんから！！
むしろ遭難してたところを助けてもらってますし！！
奴を倒せたのもあの2人がきっちり仕留めてくれたからですし！！」

そんな俺を見て軽く微笑むイケメンさん。

「フフッ……あなたは随分と謙虚な方のようですね。ですが、あなたがどのようにご自分を評価していようと、私が持つ感謝の気持ちに変わりはありません。
何かお礼ができればよいのですが……」

うはぁ……どうすっかなぁ……この人、良い人なんだけど、結構グイグイ来るタイプだ……

こういうタイプはいくら断ってもなかなか引いてくれないんだよな

あ……

しゃーない……ここで無理矢理断ってもなんか悪いし、お言葉に甘えておきますか。

「じゃ、じゃーしんりょくについて教えてもらえないでしょうか？」

俺の唐突な提案にキョトンとするイケメンさん。

「そ、そのようなことでよろしいのですか？」

お礼する側がお礼の品に納得していないという少し奇妙な状況に、苦笑いしながら

「いやー、記憶喪失の俺にとってはかなり重要なことなんですよ。これから先、とりあえず冒険者で食ってくつもりですし……」

俺がそう言うと、イケメンさんは少し考え、何かを納得したような、諦めたようなそんな表情で

「ふむ、あなたが行ったことへの対価としてはかなり不釣り合いな気もしますが、あなた自身がそれを望むのならそれが良いのでしょうね」

と不承不承といった感じで、こちらの提案を呑んでくれた。

とりあえずなんとかなったことに一安心して、胸をなでおろす。

別にそんな大したことしてないのに、大層なお礼とかされてもこっちの気が引けるっつうの……

俺のそんな様子を見たイケメンさんが再び、「フフッ」とキザったらしく笑い、話しかけてくる……
いちいち微笑が似合うな……チッ……

「では、心力についてご説明いたしますね……とその前に、神術についてはどのくらいご存知ですか？」

「ある程度はリンさんに教えてもらいました。
確か、それぞれの国にある神像に祈りを捧げ、加護を受けることで発動させることができる力とか……」

イケメンさんは俺の曖昧な答えに「なるほど」と言いながら頷く。

「概ねそれで間違っていませんが、神術を扱うにはあと2つの力が必要です。」
イケメンさんは俺の目の前で指を2本立てる。

「まず1つは創造力。
神の加護をどのように具現化させるかをどれだけ頭の中ではっきりと創造できるか……
神術を扱う上でとても大切な力です。」

なるほど……つまりイメージする力か……

「その創造が不完全だと術はどうなるんですか？」

「大概は失敗となり、術の発動はされません。ですが、ごく稀に暴走という結果を作ってしまうこともあります」

意外と怖いな……
まぁーでも、ノーリスクでこんな便利なもの使えるわけないわな……
「創造力についてはよろしいでしょうか？
では本題である心力について説明させていただきます。」

ここからだな。
もし俺に扱えないものだとしたら、神術どころか、冒険者ギルドへの登録すらできない。
つまり路上生活者まっしぐらってことだ……そんなん嫌すぎる……
「心力とは、その個人に生来的に宿る心の力を指します」

心の力で「心力」か……結構そのまんまだな……
「心力に創造力を纏わせ、授かった加護に捧げることで神術は完成し、この世界に発現します。
その際、術の難度に比例して心の器に宿りし心力を消費します。
これはまぁー休息をとることで回復するのですが、全て使いきると命に関わりますので注意が必要です」

つまりＭＰってことだな……ベタですなぁ……となると
「心力は個人個人で消費できる総量が違ったりするんですか？」

「はい、おっしゃる通りです。
心力の総量はその個人によって変化します。
鍛練により、ある程度伸ばすこともできますが、生まれ持った総量を大きく伸ばすことはできません。
心力をより多く、その心の器に秘めていることは、すでに才能と言

ってもいいでしょう。」

身ぶり手振りを交えて、丁寧に説明してくれるイケメンさん。

心力については大体わかった。

だが肝心なのは、俺自身に心力があるのかどうか……そしてそれをコントロールできるのかどうかってことだ……

「あ、あのーここまでの説明で心力については理解できたんですが、実際にそれがあるかどうかってどうやって調べれるんでしょうか？ってか俺って心力あります??」

カウンターに上半身を軽く乗り上げさせ、グイッと前のめりに聞く。いやだってこっちも必死ですから……

若干引きつつ、俺の両肩を軽く押して元の位置に戻しながら、イケメンさんは答えてくれる。

「ご、ご安心を……。

ユウ殿にも心力はきちんと宿っておりますよ。それも常人のソレより多く感じられます」

「えっ……？わかるんですかっっ！？」

思わず声がデカくなる俺を、「まぁまぁ」と諌めるイケメンさん

「神術を長年行使していると、大まかにですが他者の心力を感知できるようになるんですよ。

もちろん正確にどれくらいの心力をその心の器に宿しているかは、専用の術具が必要になってきますが……」

ベタな展開だが、この場合ありがたいことこの上ない……

「となると……あとはそれを制御できるかですよね？ど、どうすればできるようになるんでしょうか……」

その質問をしたとたんに場の空気がなんだか重くなった

「ふむ……ここまでで、ユウ殿の記憶喪失が重症の部類に入るものだとは思っていましたが、やはりかなりのものですね……一体どのようなことがあなたの身に起きたのでしょうか……」

ため息混じりに今さらそんなことを言い出すイケメンさん

ぐはっっっっ……なんで今さら……ってか地雷どこにあったんだよ……わかりずれぇよ！！

うぐ……そ、そんな目で俺を見ないで！！心が軋む！切なさが溢れてくるぅぅ（涙）

「ま、まぁ……それについてはこれから自分で調べていくつもりなんで……

と、とにかく！今は自分の心力を制御する方法を教えてはもらえないでしょうか……？」

「ふむ、そうですね……起こってしまったことを嘆いても始まりません。

恩人の頼みです。私にできることはさせていただきますよ」

微笑するイケメンさん

「あ、ありがとうございます……」

苦笑する俺……

２０（前書き）

未熟すぎる作品ですが、読んでくださる方々は確かにいるようで、大変励みになっております。
本当にありがとうございます。

インフルエンザもなんとか治りましたので、更新速度を上げれるように、またがんばります。
これからもよろしくお願いします。

20

「心力を制御するにはまず、自分の心力を意識下に置く必要があります。
これができなければ当然ですが、制御など夢のまた夢でしょう」

はぁ……リンさんとルーカスさんで慣れていたはずなのに……あの憐れむような目はやっぱきついなぁ……

最低でも、この村を出るまでにはこの世界の常識を身につけておかないとな。

今まではなんとか良い人達に巡り会えてるから無事でいるけど、この先もそうとは限らないわけだし。

この世界に身内はいないんだ。
そして世界ってやつはそんなに優しくない。

常識、仕事、それに心力……
まだまだ足りないものがたくさんあるけど、1人で生きていくために必要なモノをなるべく早く身に付けなきゃな……

「ユウ殿？聞いてますか？ユウ殿？」

右肩を揺さぶられてハッとする

やべ、またやっちゃったよ……人前で考え込むこの癖も直してかないとなぁ……

「あ、すいません……ちょっとボーッとしちゃってました」
そんな失礼極まりない俺を怒るわけでもなく、むしろ少し心配そうな表情を浮かべるイケメンさん
「そういえば、お身体はまだ万全でないのでは？
であれば、日を改めた方がよろしいのではないですか？」
うわぁ……やっぱ良い人だなこの人……ちゃんとしなきゃな俺も
「いやいや、身体の方はもう全然大丈夫です！頑丈なことだけが取り柄ですし、治療してくれた先生の腕もすごく良かったみたいなんで。
今のはホント、ボーッとしちゃっただけで……ん？」
ちょっとタイム……
イケメンさんも「？」と言う表情になる
「ってあれ？僕ってあなたに自己紹介しましたっけ？」
俺がフとそういやさっきからちょくちょく名前を呼ばれているのに気付くと、何やらイケメンさんも気付いたらしく
「あ……これは失礼いたしました。ルーカス殿からユウ殿のことについて聞いていましたので、すっかり知人のように接してしまっておりました。申し訳ございません」
そう言って軽くを頭を下げるイケメンさん

「あーなるほど。いやいや、別にそんなのは全然いいんですけど……もしよかったらあなたのお名前も聞かせてもらえますか？俺だけ知らないのもアレなんで」

それを聞くとイケメンさんは少し申し訳なさそうな微苦笑を浮かばせる

「もちろんですとも。
むしろこちらからお願いすべきことでしたね。
重ね重ね申し訳ございません」

そう言いイケメンさんは握手を求めてくる

「私の名はクルスと申します。
このギルドのしがない職員でしかありませんが、これからもよろしくお願いします」

がっちり手を握り返し

「僕も改めて……ユウと申します。こちらこそよろしくお願いします」

笑顔で名と手を交わすことで、俺達の間に何かが生まれたような気がした。

それが何なのか、まだわからないけれども、大切にしていけたらいいなぁ……と心から思う。

順番違いの自己紹介を終えると、クルスさんは「では改めて」と仕切り直し、心力について話し始めた。

「心力を意識下に置くためにまずしなければならないこと、それは……」

クルスさんは自分の胸に手を当て、こちらに目を向ける。

「己の内に在る、心力を宿す器。
これを明確に感じれるようになる必要があります」

心力を宿す器……
本当にそんなものが俺の中にあるのか？

自然と俺の手も自分の胸へ行く

「ど、どうすれば器を感じ取れるようになるんでしょうか？」

クルスさんは人差し指と親指を顎に添え、何やら考えながらこちらに説明し始める。

「ふむ……通常は歳を経るにつれてなんとなくではありますが、感じ取れるようになってきます。
ちなみに適齢期は大体6、7歳です。
そうなってから、学校あるいは親などから明確に感じ取るための、そしてその後に心力の制御方法について手解きを受けます。
ユウ殿は今の時点で、全く器の存在を感じ取れていないように見えるのですが、いかがでしょうか？」

マ、マジか……それってつまり、俺には心力を制御することはでき

ないってことなんじゃ……？

「は、はい……今のところ、俺の中にそういったものがあると感じたことはないです……」

見るからに落ち込み始める俺

励まそうとするクルスさん

「まだ諦めるのは早いです。
なにせ、私はあなたの内から力強い心力の存在を感じます。
すなわち、心力を宿す器は必ずあなたの内に在るのです。
どういったことが原因で今、感じ取ることができないのかは不明ですが、鍛練すれば必ず感じ取れるようになるはずです」

ク、クルスさん……ありがたいお言葉なのですが、「必ず」と言いつつ、最後に「はず」がついちゃってるよ……？（苦笑）

でもまぁ……がんばってみますか

「あ、ありがとうございます……
そうですよね！やる前から諦めるなんて絶対にダメだ！
とりあえずやってみる！今はそれしかないですよね！！」

半ばヤケクソ気味に前向き発言を並べ、己を鼓舞する。

「そうですとも！その意気です！私もできる限りお手伝いしますので、がんばりましょう！」

謎のハイテンションが場を支配し始め、クルスさんが俺の両肩に手

を置いて揺すってくる

俺も両コブシを胸の前あたりまで持ってきて

「はい！がんばります！」と意気込む

「んで、具体的な鍛練方法はどういったものなのでしょうか？」

「はい！それは……」

21

「ふっ……ふっ……ふっ……ふっ……」

薄暗がりの中、所々雑草の生えている空き地のような場所で、俺は上半身裸になり一心不乱に全力疾走していた。

気が振れて変態になったわけじゃないよ？

ヤケクソにはなってますけどね……あはははははは～

器を感じ取るための鍛練で、思うような成果が得れなかった俺は、気晴らしに身体を動かしたいとクルスさんに申し出、ここを教えてもらったのだ。

一通りの柔軟、筋トレをしてから、空き地の端から端の間を往復ダッシュする。

空き地に着き、とりあえず始めたのがいつもやっている基礎トレだった。

最初は身体を温める程度にと思っていたが、鍛練の失敗も含めてここに来てからの様々なことにイライラもピークだったせいか、気付いたら基礎トレから結構ガッツリやっていた。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

ダッシュを終え、息を落ち着かせるため一旦休憩をとることにする。

空き地のはしっこにある小さな木の枝に突っ掛けておいたタオルを

取り、汗を拭う。
ちなみにシャツもここに突っ掛かってる。
って別にいらないかこの情報……
身体能力が上がりやがってるおかげで、柔軟以外はいつもの3倍こなさなきゃ身体に負荷が懸かっている感覚を得れなくなってる……
こりゃぁ……なんか考えないと全然鍛練にならないな……ってか効率悪すぎだ。
めっちゃ重い胴着着て、重力が何十倍にもなる部屋とかで鍛練しなきゃダメかな。
うわぁ……人間離れしてきてるとはいえ、戦闘民族寄りになる日がくるとは……
苦笑いしつつ汗を拭い終わり、再び木の枝にタオルをかけ直す。
まぁー今は、それよりも心力をどうにかしなきゃいけないわけだが……
小休憩を終え、空き地の真ん中あたりまで歩き出す。
どうにもならないんだよなぁ……こればっかりは。
足を止め、頭だけ下に向けながら「ふぅ……」とため息を吐く。
足元を見ながら、思考を切り替える。
今は鍛練に集中だな……ここで考え込んでもなんも解決しないわけ

だし。

頭を上げて、四肢に力を込める。

よし……まずは一人打ち込みからいこう。

背負い投げや体落とし、内股などの柔道技を相手がいると想定して何度も掛けていく。

ボクシングやピッチングなどでよく聞くシャドーってやつだ。

これも回数を重ね続けると結構キツかったりする。

単調な練習にならないように、途中からは小内刈りや大内刈りなどの足技も入れたりすることで、より実戦に近い形で打ち込んでいく。

これも回数的にはいつもの3倍をこなしたところで、動きを止める。

「はぁ……はぁ……はぁ……スゥゥゥ……フゥゥゥ……」

耳朶に触れる音が、心臓の奏でる律動のみになる。

目を閉じ、上を見上げて深呼吸をする。

ひたすら身体を動かした後に、冷たく澄んだ空気を肺いっぱいに吸い込む。

この瞬間が俺はたまらなく好きだ。

頭の中が真っ白になる。

脱力感と冷気が身体に浸透していき、熱されすぎた心身から良い具合に熱が逃げていく。

少しの間この感触を楽しみ、目を開ける。

ここまでで身体が解れ、五感と集中力が研ぎ澄まされている良い状態が出来上がる。

「よしっ、イイ感じだな。
最後に型稽古して締めるか」

意識を柔術に切り替える。

型といってもウチの流派はあくまで、実戦武術だ。

敵の幻影を目に浮かべ、それを倒すために型を当て嵌めていく。

今、目の前に立つ幻影は隻眼、隻腕のブラック・オーガだ。

呼吸を整える。
構えは自然体。
四肢の先まで力を行き渡らせる。

次の瞬間、先の戦いで俺をふっ飛ばした横薙ぎの一閃が迫ってくる

それに対し、体勢を低くし避け、前方へ跳ぶ。

そのまま体が開らいている奴の懐へ入り、鳩尾に抜き手を放つ。

巨体が後方へ浮くが、今の一撃くらいじゃ奴を倒すことはできない。

着地後、再び奴がこちらに向かってくる。
隙だらけのめちゃくちゃな動きだが、その豪腕から放たれる一撃一撃が致命打であり、油断は決してできない。
俺は奴の動きに合わせ、呼吸法や歩法といった基礎から、突きや払い、投げなど一通りの型を以て対峙していく。

しばらくの間、その攻防が続いた。
もちろん満足のいく決着がつくまで続けるつもりだった。
だが、疲労が溜まってくるにつれ、フと先ほどの失敗が脳ミソを掠め、そこから勝手に余計なことを考え始めやがり、集中力が乱されてくる。
心力の制御なんてできないかもしれない……
こんな知らない世界でちゃんと生きていけるのか……
日本に帰れないかもしれない……
今までなんとか封じ込めてきたそんな不安や怖れといった感情が動きを重くする。
「あっ……やばっ」
一瞬、俺の動きが鈍り、大斧の一撃を避けきれずにくらってしまっ

たところで、稽古を止める。

「はぁ……はぁ……くそっ……ホント未熟だ……俺」

そのまま身体の力を抜き、背中から仰向けに倒れる。

当分、動く気しないわー

火照った身体に夜風が駆け抜けていく。

そういや森でもここでもちゃんと夜空を見てなかったな……

ベタだけど、普通に星が多く見れて綺麗だ。

東京じゃなかなか見れない夜空ですなー

だけど、月は1個なんだよなぁ……異世界には2個とか3個あるのが定番なのに……

「心力を宿す器を感じ取るための鍛練法……それは、瞑想です。目を閉じ、ひたすらに己と対峙することで、内にある器を探しだす」

……。

「そ、それだけですか？」

「え？……そうですけど……何かお気に召しませんでしたか？」

「い、いやいや……別にクルスさんが悪いわけじゃないですしね……
ま、まぁーとりあえずやってみます！」

ダメだった……
いくら目を瞑って「うむむむむむ」と唸ってみても、なーんも見当たらなかった……

「はぁ……俺には心力を制御するなんてできないってことなんだろーなぁ……。
ってかそりゃそーだろ、大体こちとらこの世界の住人じゃねーんだっつうの！
無茶ブリもいいとこだぜ……いやマジで……
はぁ～～～～～～～～～～……」

星空に向かって盛大なため息をついてやるしか、その場で俺ができることなんてなかった。

なーんもやる気がしないので、ふて寝をしていると夜空に山吹色が混じり始めた。
あー……そろそろ戻らないとなぁ。と思い、立ち上がる。
「んあぁ～～～」
背伸びをし、シャツとタオルを取りに行く。

一旦ギルド支部へ寄ってから、治療院に戻りますかな。
クルスさんにちゃんとお礼しなきゃだしなー。
タオルは洗ってから返そう。
「でも結局、稽古も中途半端に終えちゃったし、心力については絶望的……踏んだり蹴ったりとはこのことか……」
項垂れたつつ、汗と汚れを拭い、シャツを着て、タオル片手にギルドを目指す。

カランカラーンという音をさせながらギルドの扉を開くと、中にはクルスさんがおり、彼と団欒している見知った美人が居た。
「あ、お帰りなさいユウ殿。気晴らしはいか……」
クルスさんの台詞を最後まで聞けずに、俺は後方にぶっ飛んでいた。
なんか最近こういうの多くね？

22

瞬時に空中で体勢を整え、着地する。

「くっ……」

完全に勢いを殺すことができず「ズサァァ」と後方へ地面を滑ってから、やっと止めることができた。

「い、いきなりなに……ってうおっ！？」

間髪入れず相手は上段蹴りを側頭部に叩き込んでくる。

咄嗟に腰を落とし、これを避けるが、次の瞬間には顔面に相手の足裏が迫る。

「なっ！？……マジかよっ」

身体を後ろへ反らし、ソレを避ける……が、目の前で蹴り足が旋回し、踵落としとなって降ってくる

身体を無理やり左に捻りながら地面を蹴る

そのまま、前回り受け身を取りながら地面を転がり、相手から距離をとる。

後ろから「ドガッ」という地面を穿つ音がする。

冷や汗をかきつつ、立ち上がり振り返る。

「ちょ、ちょっと、とりあえず話を……ってストップ！ストップ！」

目の前ではすでに相手がステップを踏み終え、こちらに背を向けていた。

問答無用かよ……（汗）

後ろ蹴りが鳩尾に向かって真っ直ぐ放たれる。

もう……なんなんだよ！！バーサクでもかかってんのかっっ！？

瞬時に集中する。

蹴り足の側面に左の掌を当て、右に軌道をズラしながら半身になることでカワす。

軌道を乱されたにも関わらず、瞬時に蹴り足を引き戻し、その勢いを利用して軸足を半回転させ、こちらへ向く。

うはぁ……すげーバランス感覚……

って感心してる場合じゃないな。離れなきゃ

急いで後ろへ跳び、再び相手と距離をとる

そのまますぐ追撃がくるかと思ったけど、ないってことは、やっと話をしてくれるってことか？

そんな淡い期待も、相手の鋭い眼光に撃ち抜かれ、脆くも崩れ去る（涙）

ってか気配に殺気が混じってきてますが……いやいや、なんでやねん……

「ズドンッッッ！！」

戸惑う俺を他所に相手がこちらへ弾丸のようなスピードで飛び込んでくる。

俺の目前で軸足を地面にめり込ませ、強烈な中段横蹴りを心臓目掛けて放ってきた。

正直、避けるのは簡単だ。

だけど、このままじゃ埒があかない……なんせ会話ができないんだもの（涙）

なんとかこの戦闘を終らせて話を聞くしかないわけだが……

どうすっかなぁ……

はぁ……まぁーしゃーないか……

「ガッッッッ！」

石で石を割ったような鈍い衝突音が木霊する

俺は胸の前で腕を交差させ、相手の蹴りを真正面から受け止めていた。

これには相手も驚いたようで、殺気がみるみる内に霧散していくのが感じられる。

「いっつぅ……やっと止まってくれましたか……一体なんでこんなことを？エリカさん」

そう、ギルドに入るなり中段の横蹴りをかましてくれただけでなく、追い打ちをかけ、最後には殺気混じりのマジ蹴りまで放ってきたのは……見知った美人エルフナースだった。

「……」

エリカさんは相変わらず答えてくれず、広場に張りつめた空気が漂い始める。

そんな中、なんの気負いもなくこちらに向かってくる人物がいた。

パチパチパチパチパチ……

「いやはやお疲れさまです。お二人ともお見事でした」

爽やかな笑顔で、拍手と共に労いの言葉をかけてきたのはクルスさんだった。

場の空気もなんとなく和む。

っていやいや……お疲れ様じゃねぇよ……止めろよ

「クルスさんもなんか知ってるんでしょ？一体、なんでこんなことに……？

ってかエリカさんも！そろそろ話してくださいよ！」

「……」

いやいやいや……こんな目の前で何度もスルーするとかひどくね！？

さっきまでのあの愛らしい笑顔は嘘だったというのか……

俺が泣きそうになっていると

「ユウ殿、よくご覧になってください。彼女はエリカさんではありませんよ？」

「……はい！？」

驚いて目の前の彼女をよぉーく見てみる

目鼻立ちは完全にエリカさんだ……こんな美人、見間違えるわけが……ってあれ？

言われてみれば、エリカさんは髪型がショートボブだったのに、彼女はポニーテールだ。

ナース服もエリカさんはワンピースタイプで下はスカートだったのに、パンツタイプのものだし……

しかも、今だに足も下ろさずにこちらを睨み付けてくるその迫力や纏う雰囲気は、治療院で会ったエリカさんのソレとかけ離れすぎてる。

可愛いって単語より怜悧とか冷静とかそんな言葉がよく似合う感じ……わかる？ってわかるわけないか……

「でもエリカさんじゃないとしたら……ってその前に足下ろしません？」

「……」

俺の提案に少しのあいだ逡巡した後、納得してくれたのか足を下ろす彼女。

だが、じーっとこちらを睨み付けたままだ。

「ナナさん、そろそろ許してあげてもよいのではないですか？
ユウ殿も悪気があってのことではないでしょう」

いやいやなんで俺が悪くて、向こうが許す側になってんだよ……逆だろ……
俺の両腕、まだジンジンしてんですけど……

「あ、あのぉ……一体何がどうなってるんでしょうか？この方はどなたで、なぜ俺が襲われることに……？」

クルスさんは相変わらずの笑顔をこちらに向け

「フフッ。ご説明いたしますので、とりあえず中へ入りませんか？
お飲み物もご用意しておりますので」

それを聞くとナナと呼ばれた女性がクルっと回れ右して、ギルド支部の中に入っていく。

「さぁ、ユウ殿も。」

「は、はぁ……」

23

気まずい……
果てしなく気まずい……

ギルド支部の中に入ると、クルスさんが壁際の隅に置いてあった丸椅子を3脚、片方のテーブル周りに置いた。

「こちらで少しお待ちください。今、お茶を用意して参ります」

と言うと、カウンターの奥にあるドアの向こうへ消えていった。

つまり、今俺はエリカさん似のキックの鬼と2人っきりでこのフロアにいるわけで……

うぅ……なんかしゃべらなきゃマズいか？

でも、睨んではいないにしろ、こちらに向いてる視線が尖ってる……纏ってるオーラが刺々しい……

うぉぉぉ……空気が重い……呼吸が苦しい……早く戻ってきてくれクルスさん……死んじゃう……俺、死んじゃうよ……？

それからどれくらい経っただろうか……地味につらいこの空間に耐えられず、いっそ治療院に帰っちまおうかと考え始めた頃、やっとクルスさんがお盆を片手に戻って来た。

「お待たせいたしました。お口に合えばよいのですが……」
そう言いながら各々の前にソーサーに載ったティーカップを置いていくクルスさん。
よかった……がんばった……俺。
あの空間を耐え抜いた自分へ感動していると、カップからたつ湯気に乗って、良い香りが漂ってきた。
カップの中は澄んだ綺麗な緋色で満たされていた。香りもすごく良いし紙パックとかペットボトルに入ったやつとは全然違う。
俺が感心してカップの中を見つめていると、クルスさんも席に着き
「さぁ、冷めないうちに召し上がってください」
「は、はい。いただきます」
カップを持ち上げ、傾ける。
「うま……」
ってか何よりほんわかするわぁ……張り詰めていた心も緩んでくる。
目を向けると、心なしかキックの鬼の表情も柔らかくなったような気がする。
場が和んできたところで、クルスさんが

「お二人共、お口に合ったようでなによりです。では、そろそろ本題の方に入りましょうか」

と言い、自らが持っていたカップをソーサーに置いてから、キックの鬼に掌を向ける。

「彼女の名前はナナさん、私の娘で、エリカさんの双子の姉です」

……。

あー……はいはいはい……なるほどね。このパターンね。まぁーでもそうくるかぁ……あれでしょ？よくあるあの……えーっとなんだったっけ……そうそうアレだアレ……いやまぁ……なんかもう……ホント疲れた……ウチに帰りたい……（涙）

「そ、そうだったんですか……とてもこんな大きな娘さんがいらっしゃるようには見えなかったので、びっくりです……」

全身から力が抜けるような感覚を覚えながら、ぶっきらぼうに言葉を紡ぐ……

いや、答えただけでも俺がんばった方だと思うよ？

それに対しクルスさんは満面の笑みで

「ははははっ。それは嬉しいことを言ってくれますね。最近は歳のせいか、物忘れなんかも多くなってきたんですが、まだまだ現役でがんばっていけそうですね」

「そ、そうですね……まだまだ全然若々しいと思いますよ？非常識

なほどに……」

最後の方はボソッと言っておく、一矢報いてやりたいじゃん……

まぁ～クルスさんのことは今はそんないいんだよ。

肝心なのはキックの鬼ことナナさんについてだ。

「えーっとあの～そうなると、ナナさんはどうして……その、俺に襲いかかってきたのでしょうか？」

俺は紅茶をちびちび飲んでいるナナさんをチラチラ見つつ、ちょっと責め気味にクルスさんへ質問する。

襲撃の被害者ですからね？俺。両腕だって今だに痛いし！

そんな俺の心境もどこ吹く風なクルスさん

「ふむ、それについてはナナさんにお話していただきましょうか」

再びカップを持ち上げながらナナさんに話を振った。

えぇっ？ここでナナさんに振っちゃうの？

ってかむしろしゃべれるの？この人

内心驚きつつ、恐る恐るナナさんへ顔をむける。

紅茶を飲み終え、一息ついたらしいナナさんは、これまでで一番リラックスした表情で、こちらを見つめてきた。

……うん、やっぱ美人だなぁ。なんか照れる。

とか油断していると……

「なぜ、治療院を抜け出したの？」

うぉしゃべった！？声ちっさいけどしゃべった！！

「……答えて」

「は、はい！……ってえーっと……あぁ、治療院から抜け出した理由でしたね。それはえーっと、なんと申しましょうか……」

背中に冷たい汗が一筋。

忘れてた……俺、脱走した身だったんだ……心力のこととかで頭からすっ飛んでた……うわやべぇ……「暇で……」とか絶対言えない……でも正直に話す以外、選択肢なんてない……だって嘘のつきようがないもん……

俺は両手を両膝に置き、頭を下げる

「すいませんでしたっ！どうしても外で身体を動かしたくなってしまって……

でも、それを言っても反対されるだけだと思って……」

それを見たナナさんは

「エリカはすごく心配していた。安静にしておくよう伝えたはず」

視線がまた鋭くなる。

うはぁ……当然ながらめっちゃ怒ってる。
背後から「ゴゴゴゴゴゴゴ……」って聞こえてくる……。
汗が吹き出る……悪いのは明らかに俺だ。
「ご、ご心配をおかけしたことはホントに申し訳なく思っています……」
いや実際、看病してるほうからしたらそりゃ「ふざけんなコノヤロー！！」なことこの上ないよな。
せっかく治療して看病までしてやった人間が、目を覚ました途端に脱走とか……
エリカさんにもきっちりきっかりちゃんと謝らないとな。
っつか、「脱走する時にワクワクしてた」とか「あわよくば酒場とか入ってみたかった」とか絶対言えないな……マジで殺しにきそうだしこの人。
なんせいくら病室から抜け出したからと言っても、一応は怪我人の俺に殺気を纏わしたマジ蹴りを放つ人だ。
いやいやわかってるよ？確かに悪いのは俺だ。でもだからってあれはやりすぎだろ……もっとこう……話し合いとかいろいろ……
……ってダメだダメだ。メチャクチャだけど、なんだかんだでナナさんも俺の身体を心配して怒ってくれてるはずだ。ここはちゃんと謝るのが筋だろ。
「それに、私の蹴りを全部避けた」

……。

「え？」

「エリカを心配させた。
報いを受けるのは当然。
なのに全て避けた。」

いやいやいや……マジか？この人。
とっさにナナさんの目を見る。

うん、こりゃマジだな。目ヂカラが半端ないもの……ん？いやでも
「出会い頭の一撃と、最後の一撃……2発ももらったじゃないですか」

そう言う俺に、かぶりを振るナナさん

「最初のは後ろに跳んでダメージを軽減させてた。最後のもあなたにダメージを与えれてない」

こ、こんな理屈、誰が納得するんでしょうか……
俺には、良いのが決まるまで蹴られ続けろとしか聞こえません……
悪魔かこの人……

あまりの理不尽さにうち震えていると

「フフフッ。神術を使用してないとはいえ、初見でナナさんの技をああも見事に捌き、正面から受け止めても倒れなかったのはユウ殿が初めてですからね。悔しいのでしょう」

「……そんなことない。本気出してないし」

「フフフ」

なんだこの親子……

２４（前書き）

こんな未熟な作品を読んでくださり、誠にありがとうございます。

（笑）や（涙）などの感情表現について、過去の話についても直していこうと思っています。

しかし、未熟な私の腕では今の更新速度を保ちつつ、改稿作業をするということが難しいです。

ですので、大変申し訳ないのですが、改稿作業についてはちょっとずつ進めていくということでご納得いただければと思います。

ご迷惑をおかけして大変申し訳ございません。

24

俺が不思議親子にドン引きしていると

「パンッ」と手を叩き、いつもの微笑みを携えたクルスさんが

「さて、そろそろお開きにしましょうか。
もうすぐ7時になります。他のギルド職員が出勤してくる時間です。
さすがに彼らを横目にお茶会はできませんからね」

一度壁に掛かった時計を確認するような仕種を取ってからそう言う。

あんなとこに時計が……全然気づかなかったな。

この世界でも時間の概念ってあるんだな……他にも、日付とか年月もあるのかもしれない……後で調べておかなきゃな。

にしてもやっとこの謎空間から解放されるのか……疲れた……いやマジで。

「ふぅ……」と肩の力を抜く。

「まだ、話は終わってない。蹴りた……反省させてない」

いやいや、さんざん謝ってるやんけ！！ってかわざわざ本音が顔出してらっしゃいますけどっっ！？

クルスさんは苦笑しつつ

「続きは治療院でするべきでしょう。もともとナナさんはユウ殿を探しに来たのであって、お仕置きをしに来たわけではないのですから」

まだ続くのかよぉ〜〜……いやまぁ、自業自得か。

エリカさんにはちゃんと謝らなきゃならないわけだし。

ストレス発散のために身体動かしてきたのに、何の意味もなかったな……

口元が苦みばしった笑みを作る。

「むぅ……わかった。続きは院でする。」

仕方なくという感じで納得したナナさんは、椅子から弾みをつけて「トンッ」と降りる。

「ごちそうさま。父さん。行く」

俺に目配せし、ドアに向かって歩いて行くナナさん。

「お粗末様でした。エリカさんにもよろしく伝えておいてください」

笑顔でそれを見送るクルスさん。

「ユウ殿も、またお会いできる日を楽しみにしております。心力については、諦めずに鍛練を続けてみてください。必ず身を結ぶはずです」

な、なんかしばらく会えなくなるみたいな言い方だな。

「え？クルスさんはここの職員さんなんじゃ……」
と聞こうとしたタイミングで
「早く」
とナナさんがこちらに声をかけてくる
「行ってあげてください。ナナさんが家族以外でこれほど他者を気にかけることなんて、今までありませんでした。ユウ殿のことを気に入ったのだと思います」
それキックの的としてだろがっっ！！
「え、あ、そうなんですかね？」
「えぇ。ですからぜひ仲良くしてあげてくださいね。あっ！でも、お付き合いするとなると話はまた別ですが」
クスクスと笑みを深めるクルスさん……後半、目が笑ってませんよ？
「まだ？」
闘気を纏い始めるナナさん。
いやいや沸点低すぎだろうっ！？
「そ、それじゃ！なんか行かないとやばそうなんで！ギルドのことや心力のこと、あと空き地の場所とか色々教えてもらってありがとうございました。今度、改めてお礼しに来ますのでその時また色々

教えてください……ってなんか図々しいですかね？」
軽く頭を下げつつクルスさんを見る
「いえいえ、私でお教えできることであればいつでもどうぞ」
笑顔でそう返すクルスさん。
ありがたいなぁ……と心が温まるのを感じる。
「それじゃ、また！今日はこれで失礼します！」
「はい、またお会いしましょう」
一礼し、椅子から降りる。
「あ、片付けは……」
「フフッ。やっておきますので、ご心配なく」
「あ、はい。すいません」
急いで出入口で待つナナさんのもとへで向かう。
「遅い」
「す、すいません」
「それじゃ、行く」
カランカランとナナさんがドアを開けると、すでに陽の光が広場に射し込んでいた。

モヤのかかった広場の匂いに新鮮さを感じつつ、そこを突っ切って治療院へ歩き出す。

「はぁ……」

忘れてた……

クルスさんとの別れ際の会話で心が温かくなっていた俺は、忘れてた……

あれ？これまた2人っきりじゃん？……悪夢再来じゃん？

歩きつつ、げんなりしながら前を見る。

その先にはナナさんの小柄な背中。

ピョコピョコ揺れるポニーテール……。

「うはっ……」

まさかの展開に思わず小さく吹き出す。

うーん、猫尻尾も犬尻尾もよかったが、馬もなかなか捨てがたい……

「しっ」

「えっ？」

唸る烈脚！

耳元を通り過ぎる疾風！
地面に落ちる一滴の汗！

「……」

「ちっ」

舌打ちをし、俺の目の前から蹴り足を引くナナさん。
右に捻りながら反らしていた上半身を戻す俺。

スタスタと何事もなかったように歩き始めるナナさん。

「はぁ～……」

美人と2人っきりなのがチャンスじゃなく、ピンチでしかないこの状況……
泣けてくるんですけど……

「着いた～～」

来た道帰って来ただけなのに……なんだろう……この達成感……砂漠で遭難して、やっとオアシスを見つけたような……

そんな感慨に耽っていると

「エリカが中で待ってるから、ちゃんと謝って」

横に立つナナさんが刺々しく言い放つ。

「りょ、了解です」

誰が誰を気に入ってるんですか？クルスさん……

結局、道中も一切しゃべらなかったし……顔面に上段横蹴りぶちこまれるし……

「じゃ、行く」

先に歩き出すナナさんの後ろに着いて行く。

治療院はこの村の建物がほとんどそうなように木造建築で２階建てだ。大きさも周りにある民家よりも２回りくらい大きく、塀で囲まれている。

脱走時には気づかなかったが、出入口のドアの上に〈ナナ＆ａｍｐ；エリカ治療院〉とピンクや黄色の可愛らしい色合いの文字とハートや花びらのイラストが描かれた看板が掲げてある。

うーん……完全にエリカさんの趣味だろうな……

両開きのドアを片方押し開くと、すぐにソファーやテーブルがいくつかある待合室のような部屋があった。

後ろでドアが閉まる音を聞きつつ、キョロキョロしていると

「パタパタパタ」という足音が聞こえてき、パタンと待合室の奥にある２つのドアのうち、左側の方が開く。

もちろんエリカさんだ。

彼女は俺とナナさんを交互に見て、一度安堵のため息を吐いた。
それから顔をわかりやすくむっすりさせると、こちらに近づいてき、俺の目の前で足を止める。
あっ……謝らなきゃ！
「エリ……」
「もう！心配したんですからね！！安静にしていてくださいって言ったじゃないですか！！」
ナナさんと同じく俺より頭1つ分背の低いエリカさんが、俺を見上げながら叱ってくる。
なんだろう……さっきまでキックの鬼と居たからなんだろうか……
ズキューンきました……これがいわゆる萌えなんでしょうか……？
鷲掴みされたぁ……これはヤられたわぁ……
ボーッと目の前で可愛らしく怒る美人エルフナースを見ていると
「ドスッ」
横合いから手刀が腹に叩き込まれた。
「ガフッ……」
「ちゃんと謝る」
「げほっげほっ……ぁぃ……」

呼吸を整え、姿勢を正す。
一連の流れに叱るのを忘れて呆気に取られているエリカさんの目を見つめ、頭を下げる。

「エリカさん！ご心配おかけして、本当にすみませんでした！！」

「ふぇ？え？……あぁ……」
と少し戸惑いを見せた後、「コホンッ」と一旦小さく咳き込み

「反省しているようだし、無事帰って来てくれたので、今回は大目に見てあげます。
でも次からはちゃんと一言断ってからにしてくださいね？
それとあんまり無茶してもダメ！一応怪我人なんですからね？」

良い人だなぁ……次からは絶対裏切るようなことはしちゃダメだな。

頭を上げる
「はい。次からはエリカさんにご心配をおかけするようなことはしません。」

「はい。ならいいです」
笑顔が咲き乱れる

「私は？」

「も、もちろんナナさんにもですよ」

「ふーん……」
な、なんだ？こえぇんですが……

「お姉ちゃんもご苦労様！ごめんね？私の代わりに走り回ってもらっちゃって」

「いい……急患がくるかもしれないからどのみちどちらかが待機してなきゃいけなかったし、いつもより早く目が覚めちゃって暇だったし……」

いや、暇潰しだったんかい……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5412z/

異世界でベタに生きる

2012年1月14日14時00分発行